常陸大宮市史研究

第１号

ごあいさつ　常陸大宮市教育委員会　教育長　上久保　洋一　1
創刊にあたって　常陸大宮市史編さん委員会　委員長　高　橋　修　3

＜巻頭企画＞
座談会 ―市史編さんと「郷育立市」―　常陸大宮市史編さん委員会　5

＜研究ノート＞
藤田稔写真資料仮目録 ―旧大宮町出身の民俗学者・藤田稔の民俗研究（一）―
林　圭史　27

＜資料紹介＞
香川敬三と明治の水戸藩士 ―武田金次郎らの知られざる末期―　石井　裕　41

＜研究ノート＞
常陸大宮市でヒメボタルを確認　佐々木　泰弘　52(25)

＜資料紹介＞
文献に見られる常陸大宮市の植物（1）　藤田　弘道・中﨑　保洋　66(11)
渡邉明氏採集の常陸大宮市内考古資料（予報）　萩野谷　悟　76 (1)

常陸大宮市史編さん事業　活動記録　77
「常陸大宮市史編さんだより」まとめ　94
刊行物紹介　110

2018.3
常陸大宮市教育委員会

【巻頭写真１】香川敬三肖像（個人蔵）
（石井裕「香川敬三と明治の水戸藩士－武田金次郎らの知られざる末期－」参照）

【巻頭写真２】ヒイラギソウ（藤田弘道・中﨑保洋「文献に見られる常陸大宮市の植物（１）」参照）

【巻頭写真３】渡邉明氏採集資料（萩野谷悟「渡邉明氏採集の常陸大宮市内考古資料（予報）」参照）

【巻頭写真４】ヒメボタル（佐々木泰弘「常陸大宮市でヒメボタルを確認」参照）

常陸大宮市史研究　第一号

平成三〇年三月
常陸大宮市教育委員会

ごあいさつ

『常陸大宮市史研究』が創刊される運びとなりました。ご執筆くださった先生方をはじめ、事業にご協力いただいたすべての皆さまに厚く御礼を申し上げます。

さて、常陸大宮市史編さん事業は、町村合併、市政施行一〇周年となる平成二六年（二〇一四）より企画され、平成二八年（二〇一六）八月、茨城大学の高橋修教授を委員長に常陸大宮市史編さん委員会が発足し、本格的に始動しました。常陸大宮市全域を調査対象とする本事業は、市内に伝わる歴史や文化、自然環境などを総合的に調査し、地域の魅力を再発見・再評価する事業として、六つの専門部会を構成し、調査を開始しております。

常陸大宮市は、五つの町村が合併して誕生した、茨城県内で二番目に面積の広い市です。茨城県北部の中山間地域に位置し、那珂川と久慈川が流れる自然豊かな地域であることから、古来より人々の営みの場となっており、数多くの貴重な遺跡が発見されています。また、中世には佐竹氏一族が多くの所領を有したほか、江戸時代には水戸藩領として、西の内紙に代表される和紙や蒟蒻、火打石など、特色ある産物の宝庫である一方、幕末期には争乱の舞台にもなりました。このように、当市は多様な歴史を歩んできましたが、近年では地域住民の高齢化や史資料の散逸に伴い、貴重な歴史を次世代へ伝えることが困難になりつつあります。歴史を記録し、後世へ引き継ぐことは、自治体が果たすべき責務であり、市史編さん事業の大きな役割でもあります。また、当市は「郷育立市」を宣言し、郷土を知り、故郷内外で活躍出来る人材育成に努めています。その根幹となる基礎資料の集積を常陸大宮市史編さんが担い得るという面でも、本事業の役割は非常に大きいと言えるでしょう。

最後になりますが、本事業の発展を祈念するとともに、皆さまのさらなるご支援とご協力をお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

常陸大宮市教育委員会　教育長　上久保　洋一

創刊にあたって

「市史編さんの基本方針」に基づき、平成二八年（二〇一六）度、常陸大宮市史編さん委員会が組織され、市史編さん事業が本格的にスタートしました。「郷育立市」のスローガンを掲げる常陸大宮市の将来にわたる「まちづくり」の指針になるような市史の編さんを目指したいと思います。そのためにはこの地域の歴史や風土に関心をもつ研究者、そしてこの土地を故郷とする市民の皆さまのご協力が欠かせません。長期にわたる事業となることが予想されますが、どうぞ末永くご支援いただけますようお願い申し上げます。

学術的な市史をまとめるためには、市内外に所在する資料の調査・収集が不可欠です。それらをデータとして分析・研究することにより、はじめて客観的な歴史叙述が可能になります。特に編さん事業期間の前半は、こうした地道な作業に時間を使わなければならないため、編さんの進捗はなかなか皆様の目には見えてこないかもしれません。その陥穽を埋めるために、編さん委員会としては普及活動にも積極的に取り組みたいと考えています。また一方では見えてきた常陸大宮市の歴史像や、新たに発見された資料について、できるだけ速やかに内外に公開し、ご意見やご批判をいただきたいと考えます。『常陸大宮市史研究』の刊行意義は、この点にあります。

内容としては、市史を叙述するための研究成果はもちろんのこと、研究の途中経過の報告や、新たに発見された資料紹介、あるいは実施した資料調査の概要など、逐次誌上において公開していきます。われわれの研究・調査の成果を、いち早く市民にお伝えし、幅広い研究者に検証していただくことで、市史本編の充実につなげ、叙述や編さんの客観性を担保したいと考えます。常陸大宮市の歴史や風土に関心を持つ皆さまに、一人でも多く手に取っていただけるよう、充実した内容の研究誌を目指しますので、どうぞご期待ください。

市史研究の創刊にあたりご執筆・ご協力いただいた皆さまに、末尾ながら厚く御礼申し上げます。

常陸大宮市史編さん委員会　委員長　　高橋　修

《巻頭企画》

座談会　－市史編さんと「郷育立市（きょういくりっし）」－

常陸大宮市史編さん委員会

〈趣旨説明〉

常陸大宮市史編さん事業が始動して約一年が経過し、調査の過程で市民と接する機会も次第に増えてきた。今後はより一層、事業への協力を呼びかけていかなければならないだろう。そのためには、多くの人に事業の概要を知っていただくことが肝要であり、その一環として、六名の部会長による座談会を開催し、市史編さん事業で取り上げるべきポイントや、今後の取り組み、「郷育立市」との関わりなどについて、思いの丈を語っていただいた。

《常陸大宮市史編さん委員会委員》
高　橋　修：（市史編さん委員長、古代・中世史部会長）
鈴木　素行：（考古部会長）
添　田　仁：（近世史部会長）
佐々木　啓：（近現代史部会長）
大津　忠男：（民俗部会長）
桐原　幸一：（自然部会長）

《常陸大宮市史編さん事務局》
石井　聖子（常陸大宮市教育委員会文化スポーツ課　参事）
高橋　拓也（　〃　〃　主事）
渡瀬　綾乃（　〃　〃　嘱託）
米山　寛（　〃　〃　嘱託）

高橋修（以下、高橋）：本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。『常陸大宮市史研究』第一号の特別企画ということで、編さん事業の中核となる私たち編さん委員が、編さん事業をはじめるにあたっての思いを市民の方に伝えるとともに、事務局と意見交換する場を公開するということで、座談会を企画していただきました。忌憚のないご意見をいただき、率直な意見交換ができればと思います。よろしくお願いします。

変わり行く学説

平成29年10月２日に開催した座談会の様子

石井聖子（以下、石井）：常陸大宮市が五町村（大宮町、山方町、美和村、緒川村、御前山村）の合併で誕生して一〇年以上が経過しました。茨城県内でも多くの市町村が合併しましたが、そのなかでも先駆けて新しい市史をつくるということで、市史編さん事業がスタートしました。市民の皆さまにも、なぜ今自治体史を作るのかということをご理解いただくために、今回の座談会で、先生方にご意見をいただこうと思います。

司会・**石井聖子参事**

五町村のなかで一番新しく作られた『美和村史』は平成に入ってからの刊行ですが、それもすでに二〇年以上が経過しております。古いものは昭和五〇年代に刊行されており、この間、学問の世界では大きな進展がありました。かつては通説として定着していた学説が否定される、ということも起こっていると思います。そこで、そのような事例を簡単にご紹介いただければと思います。まずは委員長を務める古代・中世史の高橋部会長からお願いします。

高橋：学説が変化する要因には、社会状況や、研究を取り巻く様々な環境の変化などがあります。私たちのような歴史学研究者も時代を生きているわけですから、問題関心も変化し、事件の捉え方もまた変わっていきます。

私が専門とする分野では、武士や武士団の捉え方が近年になって大きく変わりつつあります。かつて、武士とは、在地領主あるいは開発領主のことを指し、人々を支配する側面や、東国の草深い農村を切り拓いていくイメージで語られてきました。特に、大掾（だいじょうし）氏のような、国司や郡司に連なる権利を得て開発を進める豪族は、一族の所領を分割する一方で、惣領権、すなわち全体を統括する権限を創出していったとされます。一つの武士団として、分割された所領を持つ一族を統制する姿、『茨城県史』でそのような歴史像が見事に描き出されたこともあってか、どこの自治体史でも皆、同じような流れで叙述されてきました。

高橋修氏（常陸大宮市史編さん委員長、古代・中世史部会長）

そうした中、近年の歴史学界、中世史の研究分野では、今までの在地領主説、開発領主説とは異なり、武士の本質は都で武芸を司る身分にあるという、いわゆる職能論、都の武士論が提起されます。武士は東国ではなく都で発生する。武士を一つの身分として捉えれば、身分を認定するのは天皇、朝廷ですから、武士は都で武芸を司る身分として成立するということになります。そのことを重視すべきだという説が提起され、学界で承認されるようになりました。

ただし職能論、都の武士論が地域史的に武士を捉える際に有効な問題提起だったのかどうかという点については注意しなければいけません。都の武士論をそのまま地域に当てはめても、その地域の歴史像は豊かにならないのです。都の武士が地域の武士と接触することで武士団が形成されるわけですが、それを都の武士による地域社会の編成という、上からの論理だけでは説明できません。中世の地域社会が抱える様々な懸案を地域の武士と一緒になって都の武士が解決することで、ようやく地域に受け入れられていくという過程をしっかりと捉えなければいけないのです。

都の武士論については新しい問題提起として、そこから色々なことを学ぶべきですが、そのまま受け入れるのではなく、新しい地域史の観点から地域の武士を再度描き直すことが、私の分野では必要になってきます。

一つ例を挙げます。家督や惣領の地位にある武士は、日常が旅だと思われるくらい、頻繁に都と行き来しています。都にいる者、鎌倉に

いる者、そして地元の本領、所領にいる者といったように、一族の中で分業関係が成り立ち、為替などの信用経済も上手に使っていきます。東国武士は西国にも所領をもっており、日本列島を股にかけて移動しています。そのなかで都市―地域間における技術や文化の交流が生まれ、地域社会に信仰がもたらされ、阿弥陀堂をもつ浄土式庭園を本領に造りだします。そうした遺跡が茨城県内にも残されています。地域社会が求めたものを武士が都や列島規模での移動によって、地域にもたらしているわけです。

このような新しい地域史的な観点から武士を描いていくことが必要です。自治体史にも取り入れるべき視点です。我々はこうした新しい視点も検証しつつどう地域史を描いていくべきなのか、常陸大宮市史の古代・中世史部会に則してみても大きな課題になると思います。

石井：ありがとうございます。続きまして、近世史の分野ではいかがでしょうか。

添田仁（以下、添田）：近世史の研究については、一九七〇年～八〇年代に大きな変化の画期があると言えます。それは、一言で表すと、「暗い近世史」から「明るい近世史」への転換です。かつて近世史は、前後の時代と比べて「暗い時代」と考えられていました。武士による厳しい支配の下で自由は奪われ、かつ国際的に孤立した暗愚な時代として描かれることも少なくありませんでした。百姓を例に挙げてみましょう。かつての百姓イメージは、武士に支配されて物も言えず、年貢の負担に追われ、「生きぬよう、死なぬよう」といった生活レベルで苦しんだ末に、百姓一揆を起こして弾圧される、というものでした。また、閉鎖的な村に押し込められて生活しているため、学問や教養から縁遠く、領主や悪徳商人に搾取されながら一生を終える、とイメージされることもありました。もちろん地域差はありますし、イメージ通りの悲惨な百姓もいたとは思います。それも近世社会の一側面として見逃せないことですが、近年の研究では、そのような百姓が全てではないことが明らかになりつつあります。

添田仁氏（近世史部会長）

たとえば、近世の百姓は年貢を納めるためだけに農業に勤しんだのではなく、商品作物や加工品の生産にも力を注ぎ、より良い条件で販売する逞しさも持っていました。生活を豊かにすることで、学問や文化をあらゆる場所で享受し、衣服や酒といった嗜好品も購入することができました。彼らは日々の暮らしを楽しむ消費者でもあったわけです。そして、武士に対しても主張すべきことは毅然と主張しました。大規模なものでは、村はもちろん、さらに広い地域の百姓たちが結集して訴訟を起こすなど、政治に対する主体性や協調性も持ち合わせていました。

先ほども話しましたように、このような視角で近世社会の解明が進むのは一九七〇年～八〇年代以降です。この時期、市内では、美和地域を除いた旧町村史が刊行された時期と重なります。ただ、当時は分析の視角が変わり始めた時期であるほか、史料的な制約もあり、学界の研究動向や成果が大いに活かされているかといえば、必ずしもそうとは言い切れないと思います。常陸大宮市の市史編さんでは、「明るい」とか「暗い」といった評価に捉われることなく、近世社会を生きた人たちの実像を歴史資料のなかからリアルに描き出したいと考えています。

佐々木啓氏（近現代史部会長）

石井：近世史に続く時代の近現代史の分野ではいかがでしょうか。

佐々木啓（以下、佐々木）：近現代史研究においても、移動という視点を取り入れながら社会を描くということが大きなポイントになっています。私は一九三〇年～四〇年代の戦時期を中心に研究をしていますが、この時代の歴史像については、移動の視点を抜きに考えることはできません。たとえば満蒙開拓移民については、近年社会学や経済学なども含めた多分野で研究が進んでいます。青少年義勇軍や「大陸の花嫁」のことなど、個別の政策、事例について議論が深まっているほか、移民を送った側の地域社会の背景や実態に注目が集まっています。また、満蒙開拓移民とも深く関わりますが、戦地や外地からの「引揚げ」も研究が進んでいる分野と言えます。海外にいた日本人は、敗戦に伴う大混乱のなかで逃げ帰ってくるわけですが、ソ連によってシベリアに抑留されたり、身寄りを失って残留孤児となったり、あるいは途中で進退窮まって「集団自決」をしたりと、大変な苦難のなかに置かれていくことになります。その時どのようなことが起こったのか、新しい研究や証言記録が相次いで出されており、実態の解明が進んでいます。

こうした研究動向の背景には、様々なものがあると思われますが、製造業の生産拠点の海外への移転や、世界各地での難民問題の深刻化など、政治・経済・社会各領域でのグローバリゼーションが進行し、従来の生活空間を大幅に越えて人々が移動するようになっていることが大きく影響していると思われます。

また、近世史との関わりで言うと、近世が「明るく」なる一方で、近代は「暗く」なる、こういう関係があると思います。例えば、自由民権運動を例に挙げると、一九九〇年代ごろまでは、士族と豪農、そして民衆が有司専制（薩摩・長州出身を中心とした藩閥政府による専制的な政治体制）を進める政府権力に対抗し、相互に結びつきつつ議会開設や憲法制定を求めていくようなイメージがあったと思います。それは大正デモクラシーや戦後民主主義につながる「地下水脈」として高い評価を与えられていました。しかし、その後の研究では、民権運動家と民衆との関係が大きく捉えなおされるようになりました。つまり、政府対民権運動という構図ではなく、政府と民権運動がそろって民衆と相対し、民衆を近代国家の担い手として統合していくという構図が採用されるようになったのです。民権運動はデモクラシーの扉を開いたのではなく、近代国民国家への統合という、民衆にとって抑圧的な時代への入り口となったという評価が現れました。また最近では、戦後デモクラシーという表現を用いて時代状況を捉える視点も出されています。アジア・太平洋戦争後の戦後民主主義などのように、戦争が終わると市民権の拡大を求めて人々が動きます。この原理を自由民権運動期に応用できないか、と言うわけです。こうした研究動向の背景としては、政治と人々の距離感が変わってきたことがあげられます。一九五〇年～七〇年代ごろまでは、議会や政党が自分達の利益を代弁してくれるという前提が成り立ち得る状況がありました。しかし、近年では政治不信が進み、議会や政党を媒介に、国民と政治とが単純には結びつけられないという変化が生まれてきているのだと言えます。

石井：民衆はいつの時代も政治の影響を受けている訳ですか。近現代のマスコミの発達によって、政治と民衆の関わりは深く身近なものとなり、それはインターネットの普及によって益々進行しています。同じ

民衆という点では、民俗学では民衆の〝暮らし〟を見つめてきました。戦後七〇年を過ぎ、近現代史のボリュームが大きくなるにつれ、民俗学でもその政治的な影響を受けた人々の暮らしを無視することはできなくなっていると思います。今までの自治体史の民俗の記述は、ある程度の年限、現代化・近代化以前の時代を扱っていたイメージがありますが、現在、民俗部会ではどれくらいの時代まで視野に入れているのでしょうか。

大津忠男（以下、大津）：民衆の生活の様子を知ろうとするのが民俗学なので、今を生きている人々のなかでも古い歴史を持っている方、特にお年寄りの方々から聞き書きをするイメージが民俗学にはあると思います。他の先生方からもお話があったように、前の町村史編さんから四〇～五〇年経って、新しい常陸大宮市史を編さんする意義を考えていくと、昭和三〇年代、四〇年代という時期を今一度考える必要があるでしょう。

実際に地域に行って話をしますと、昭和三〇年代、四〇年代の話題になることがあります。「東京オリンピックの時に変わった」、「高度経済成長のときにガラッと変わったよね」という話が出てくるわけです。ＮＨＫの連続テレビ小説「ひよっこ」が放送されていましたが、「ひよっこ」のようにお父さんが出稼ぎに行き、娘さんが集団就職で出て行く。「ああいう感じだよね」というように、一様に当時の様子を捉えてしまう傾向も見受けられます。しかし、実はそうではないという話を常陸大宮市ではたくさん聞くことができます。先日も鷲子地区（美和地域）へ調査に行き、一〇人くらいの方とお話をしましたが、ある人はやはり「昭和三九年を機会にガラッと一斉に変わった」、「やっていることも変わったし生活も変わった」と話していましたが、隣にいる方は「そうだったかな」と首を傾げていました。「昭和五〇年くらいまで俺は、ああいうことをやっていて、同じような生活が実は続いていたよね」と話すのです。

大津忠男氏（民俗部会長）

「表面上変わったと思うもの」と、「実は変わらずに続いているもの」との両方が混在しているのが、民俗の世界なのではないかと思います。丁寧な民俗調査をしてそれを拾い上げることが大事なことと考えています。また、それが常陸大宮市では可能だとも考えています。政治史との関わりのなかで、大きな流れを考えながらも、常陸大宮市の人々はどのように生きてきたのかを明らかにしたいと考えています。市史の編さんでは人々は何を大事にして、何を変えずに守ろうとしていたのか、それを今の人たちが読んで分かるような記述・編さんを心掛けていきたいと思っています。これは近年の学説の変化ではありませんが、市民の皆さまが暮らしてきた直近の四、五〇年というのは、既刊の町村史に記されなかった四、五〇年であり、この間に生活が大きく変わったと言われるけれども、何が変わって何が変わらなかったのか、今後はどうだろうかということを問いつつ、記述したいと思っています。そのためには、おじいさんおばあさんの話を聞くだけでは不足する部分があります。先日の調査では三〇代の方達も一緒にお話をしていました。古い経験をお持ちの方に限らず、若い世代の方も含めて聞き書きをしていくことで、現実の姿を探っていきたいと考えています。

民俗学における近年の新しい学説についての話ではありませんが、民俗部会では、日本全体の大きな流れのなかで、変わるもの変わらないものを考えつつ、常陸大宮市の姿を描いていくことに努めたいと考えています。

石井：今までの自治体史ですと、民俗は様々な地域のことを一括して一つの自治体の中の事象として書いてしまっていることが多かったと思います。お話を聞くのもお年寄りだけに聞くのが多かったわけですが、手法についても色々と検討する余地があるようですね。

大津：これまでは多くの地域から事例を集めて、年中行事なら一月はこれ、二月はこれと並列して記述する形が多かったと思います。年中行事として取り上げ、一つの事例として独立させて比較することは比較的簡単です。ただし、それでは年中行事が行われている地域のコミュニティとの関わりが途切れてしまいます。地域と密着した行事として取り上げるのが最近の民俗学の手法になってきていますので、その点は注意していきたいと思います。

石井：地域を外部からの視点でどう捉え、どのように取り上げていくのか、中には新たな手法も考えていく必要性があるのではないかと思います。学説の違いだけでなく、そのような歴史の捉え方という点について、考古学ではここ数十年の間にかなり進展があったと思いますがいかがでしょうか。

鈴木素行（以下、鈴木）：旧自治体史との大きな違いは、「考古編」という呼称で括られていることですね。昭和の自治体史は、多くが「原始・古代編」という呼び方でした。考古学の対象はかなり幅広いのですが、主に文字が無い時代、文書が無い時代に大きな力を発揮するため、「考古学＝原始・古代」というイメージが旧来だったと思います。最近では、文字のある時代についても考古学の手法、視点で見ることが進んできて、中世考古学、近世考古学、近代考古学、一番新しい時代では戦争考古学というように、各時代にわたって考古学の分析方法で遺跡から歴史を考えるようになりました。今回の常陸大宮市史では、原始・古代に限らず、それ以降の遺跡や遺物についても考古学の対象とすることを考えています。

鈴木素行氏（考古部会長）

旧自治体史の刊行から今までの間には、前期旧石器捏造（ねつぞう）事件がありました。一時期、日本の歴史は七〇万年前にも遡ると世間を騒がしていましたが、それが平成一二年（二〇〇〇）に一気に崩れ去り、その後の検証作業で、前期旧石器時代はほとんどが捏造という結果になりました。『大宮町史』は昭和五二年（一九七七）に刊行されているので、ちょうど刊行から今回の市史の間に挟まってくる事件です。そのため、『大宮町史』では前期旧石器時代についてほとんど触れていません。恐らくその間に自治体史の編さんがあったところは事件の影響をこうむっていることでしょう。

もう一つ、考古学は旧い新しいという相対年代を中心に編年を組み立てます。しかし、具体的にいつ頃の物であるのかは、絶対年代との突合せが必要になります。絶対年代は、理化学的な方法で、「何年前」のような具体的な数字を出します。その方法の一つが放射性炭素年代測定法です。炭素14という放射性元素の半減期を利用し、何年前のものであるかを測ります。『大宮町史』では、例えば、縄文時代の始まりは今から一万年～一万二〇〇〇年前であると説明していますが、現在では放射性炭素年代測定に暦年較正（れきねんこうせい）が加えられるようになりました。この測定法の当初は、炭素14がどの時代、どの地域も濃度が均一であると仮定されていましたが、時代や地域によって濃度が異なることが明らかになり、測定値と実際の年代の間には誤差があるため、補正する必要が出てきたわけです。この辺の有名なテフラ（火山噴出物）に鹿沼（かぬま）軽石があります。盆栽などに使用される「鹿沼土」ですね。

一九九〇年代には、三万二〇〇〇年前に降下したと測定されていました。しかし、補正の結果、今から四万五〇〇〇年以上前のものとなっています。他には、今市（いまいち）・七本桜（しちほんざくら）というテフラがあります。一九九〇年代には一万二〇〇〇年～一万三〇〇〇年前に降下したと測定されていましたが、同様に一万四〇〇〇年～一万五〇〇〇年前に補正されました。常陸大宮市周辺では最も古い土器が今市・七本桜のすぐ下あたりから出てきているため、縄文時代の始まりは一万二〇〇〇年前位というのが、私が学生時代に習った年代でした。しかし、現在では一万五〇〇〇年～一万六〇〇〇年の間となっています。この三つを旧町村史と今回の市史の間にあった考古学の大きな変化として取り上げておきたいと思います。

石井：ありがとうございます。いま、鈴木部会長から地質のお話が出てきましたが、地質や動植物など、常陸大宮市の自然について調査をする自然部会ではいかがでしょうか。

桐原幸一（以下、桐原）：生物分野では、「学説の変化」というくくり方には少し外れるのですが、昔の生物相のまとまった記録がほぼ存在しない状況ですので、改めて生物相の調査を行う必要があると思います。

桐原幸一氏（自然部会長）

ところがその生物相自体が外来種生物等で大きく変わってきている。たとえば、水戸市では、今年に入り、特定外来生物のオオキンケイギクとアレチウリの分布調査を実施しました。アレチウリはかなり繁殖力が強いことが分かっています。涸沼にそそぐ石川川の両側は大部分がアレチウリで覆われてしまいました。今までは、在来種のクズが繁茂していた場所をアレチウリが全部覆うという、ちょっと信じられない状況になっています。

一方、一昔前に騒がれたセイタカアワダチソウは影を潜めていますが、セイタカアワダチソウが進入すると湿地が荒地化していく問題があります。オオキンケイギクが繁殖した後には、他の植物、在来植物が失われてしまう可能性があります。

また、人間による環境改変も大きな生物相の変化を引き起こしています。少し前に遡れば、列島改造や宅地開発の時期にも同じ事がありました。沢の奥や斜面など、人の入らないようなところは埋め立てられてしまいました。経済的な価値がないところは埋め立てられてしまい、そこにしか生息できない動物やそこに生育していた植物は、ほとんどいなくなってしまいました。湿地とか斜面にいた生物がいなくなっているということはいくつもあるのです。トウキョウサンショウウオもそうです。それから、カラスガイも今ではほとんど確認できなくなりました。耕地整理で河川を改修することによって生き物が姿を消しているのです。自然の大きな変化の要因の一つは外来生物、そしてもう一つは昭和以降のいわゆる経済活動です。そのため、昔の姿が非常にわかりにくくなっているのが現状です。昔の生物に関する聞き取り調査を実施しても、「オシャラクブナだっぺ」と大まかな分類でまとめて話されるので、昔の生物に関する記録を得ることが大変難しい。

経済活動と、その延長線上の外来生物、はたまた温暖化によって生物相が変わってきているのが現状だと思います。そのため、まずは現状の生物相を確認しなくてはいけません。

また、外来生物に限らず、在来生物の移動・変化も見られます。詳細は調査中ですが、今年の八月二一日に大賀江川の調査を行った際、

見たことない魚が国内移入で随分入ってきていました。また、北の地域に生息していたアオサギが水田一帯に見られる一方、かつてはそこにいたコサギの姿が消えてしまっているのです。

そのような変わりつつある生物相の現状をどのように書いていくのかが課題です。

資料の保全と戦後史

石井：市史編さんは、異なる分野の研究者が一緒になり、一つの地域を調査し、見直すという、普段は無い機会だと思います。その過程で様々な資料を見出すことになると思います。これらの保全も、市史編さんの大きな仕事と考えています。

高橋：学問を取り巻く環境の変化により、自治体史の編さんも、特に資料とどう向き合っていくのかという点において、以前とは異なってくると考えられます。

資料の概念も一九七〇年～九〇年代と比べて大きく広がりました。例えば、有形の文化財については、当然のことながら、自治体の指定したものだけを文化財と限定するわけにはいかない。未指定の資料の中にも、歴史や文化を伝える貴重な文化財が含まれています。そもそも文化財保護法の規定は、文化財には多種多様なものがあり、そのなかから特定のものを指定することによって保護することができる、こういう条文として読むべきものだと私は思います。時代や状況、人間の価値観が変わることによって、これまで注目されて来なかったものに高い価値が見出され、文化財としてのランク付けが変わっていくことは、誰もが理解していることだと思います。歴史資料についても、指定を受けた古文書や大事に管理されている公文書だけではなく、民間に保存されている様々な資料のなかにも、公的な性格を持ち貴重な歴史研究の素材となる文書は数多く存在しているのです。

日本の社会、特に近世社会では、庄屋が役所の機能を果たすなど、民間が公的な業務を請け負っていました。そのため、今でも公文書が民間社会のなかに大量に残されています。また、東日本大震災等々でのレスキュー活動を経験して考えると、生活者一人ひとりの視点ごとに、何を資料とみなすかは幅があることに気づかされます。例えば、町内での重要な決定事項に関しては、持ち回り文書などの中に資料が残されます。家族の歴史は、当然家の中に記録が残されます。戦地にどういう風に赴き、誰が亡くなったかという歴史は家族のなかにこそ記憶が深く刻まれているわけです。さらにいうと、私たちが伝承資料と呼ぶ、従来であれば二次資料的な扱いをされてきた、後世になってから編さんされた資料もあります。このように、資料の広がりは非常に多様であり、歴史学の世界でも受け止めきれなくなっている。何を資料と考え、どう残すのかは、地域ごとに固有の事情があることに、自然災害にともなう資料レスキューを通して気がつきました。本来ならば資料を使って歴史学は組み立てられますが、資料のあり方自体が歴史学研究の有り方を変えつつあるのです。資料編ばかりではなく通史編を作っていくうえでも常に考えなくてはならない問題です。とくに文献資料、あるいは古い美術品等を扱う分野についてはそのことを常に考えながら進めていく必要性を感じます。

石井：確かに、個人宅で資料の調査をしますと、江戸時代の年号が記載されたものは重要視される一方、個人の手紙や日記類については重きを置かれず、結果として目録から落ちてしまうということが従来の自治体史では多かったと思います。そういうものを丹念に拾い上げていくことで、民衆に寄り添った市史を作ることが可能になってきますし、昔と比べて情報量が増えたため、資料の扱い方や、発信・収集の仕方についてもだいぶ変わってきているのではないでしょうか。

添田：ボランティアで、歴史学を学ぶ学生や市民の皆さまと一緒に、自

然災害などで失われる危険性がある歴史資料の保全を進めています。自然災害のたびに、私たちは膨大な資料群に出会います。そのなかには古文書や美術品、使われなくなった道具類はもちろん、新発見の「お宝」も少なからずあります。しかし、被災地の文化財担当の職員は、当然ながら人命最優先で動かなければならず、文化財の保存にまで手は回りません。また、所蔵者自身がその重要性を認識していない場合もあり、廃棄されてしまうこともあります。

従来の自治体史は、地域に長く暮らす住民が自らの手で守り伝えてきた歴史資料や取り組みを活用して編さんされてきました。それらは地域の歴史や伝統を次の世代に引き継ぐかけがえのない営為の結晶であり、地元の方々の努力で残されてきたものです。しかし現在、過疎化や高齢化に伴い、地域や家庭で地元の記録や伝統を継承する力が弱まってきているように思います。災害に限らず、引越しや世代交代など日常的な変化によって、歴史・文化の語り手、そして祭りや行事の担い手が減り、無数の記録や伝統が私たちの知らないところで消失しつつあるのではないでしょうか。

自治体史編さんは、地域の歴史や文化を書きとめる場であることはもちろんですが、同時に、かけがえのない地域の記録や伝統を次の世代に継承していく「運動」でもあるべきでしょう。さきほどお話した地域の現状をふまえると、地元の記録や伝統の継承について、従来のように歴史資料の所蔵者や伝統行事の担い手の努力のみに頼るのではなく、これからは自治体としてそれらの保存の環境を整えること、そして活用の道筋を図ることにも力を注いでいく必要があるのではないでしょうか。そのような意味でも、いまこのタイミングで市史編さんが始まることは、大きな意義があるように思います。

石井：ありがとうございます。資料の保全という点では、江戸時代はもちろんのこと、明治や大正、昭和期の資料についても、時間の経過とともにその重要性が増していると思います。今後の自治体史編さんにも大きな意味合いを持つようになると思いますが、近現代史部会ではいかがでしょうか。

佐々木：従来の自治体史との比較を考えた場合、近現代史に関しては今に近い時期に関するボリュームが増えてくると考えられます。合併前の自治体史の中でも最も新しい美和村史が刊行されたのは、今から二四年前の平成五年（一九九三）でした。来年は明治維新一五〇年であり、戦後から七三年になるということを考えると、近現代史のほぼ半分を戦後が占めるようになるわけです。これまでの自治体史の戦後史叙述を見ると、高度経済成長期までしか記述していないことが多く、一九七〇～八〇年代の事柄については、簡潔に触れるか、そもそも全く触れないということで、この時代に関するイメージが湧きにくい、という状況がありました。そういう意味では、一九七〇年代以降の記述は大きなチャレンジとなるでしょう。先ほどの「移動」に近い話となってしまいますが、戦時期の常陸大宮市に関連する史料を調べると、多くの方々がペリリュー島やニューギニア、あるいはインパール作戦など、激しい戦闘が行われた地域に送られて亡くなっていることが分かります。『山方町史』に記載されている戦病死者の名簿を確認したところ、その多くが南方で亡くなっています。また、旧八里村（緒川地域）の戦時資料を見てみると、やはり南方で戦死された方が多いのです。この経験はしっかりと描く必要があると改めて思っています。今年は、茨城県北を舞台にしたＮＨＫの連続テレビ小説「ひよっこ」が話題になりましたが、主人公の叔父にあたる宗男もインパール作戦に参加した過去を持つという設定でした。高度成長を含め、戦後の人々の考え方や行動のあり方というのは、戦争を起点にしている側面があるのだと思います。そういう意味で、戦争経験を含めた戦後史をどう見ていくかというのは、大きなポイントになると考えています。

市史で特筆すべき点

石井：今回の常陸大宮市史を編さんするにあたり、各部会で調査が進んでいることと思います。そこで、興味深いところ、面白いところ、重きを置きたいところなどについて、是非ご意見をください。

高橋：古代・中世史部会では、佐竹一族についてかなりの比重をもって検討しなければならないと思っています。鎌倉時代の史料は限られていますが、佐竹氏の成立と常陸大宮市域との関わりについては、岩瀬氏という、『吾妻鏡』に出てくる佐竹氏の被官の一族を、常陸大宮市域の岩瀬地区に関わる領主として位置づけられないかと検討を進めたいと考えています。学説が錯綜しているため、それを整理するところから始めなくてはなりませんが、この地域と佐竹氏との関わりを考える一つのヒントにはなると思います。戦国期には、部垂（へたれ）氏を中心に、高部氏などの佐竹一族がこの地域に所領をもち、所領名を苗字とするようになります。常陸大宮市は、中心部に佐竹氏本宗家の本領がおかれた常陸太田市とはまったく対照的な地域です。下野との国境であり、那須氏や宇都宮氏との勢力圏の境界に配置された佐竹一族の拠点形成や所領経営のあり方を明らかにすることが課題です。

　そして佐竹一族という武士団の全体像を捉えるには、市域全体を巻き込んで起こった部垂の乱をどう位置づけるのかが問われます。佐竹氏の系図の中で、部垂一族は傍流のように位置づけられていますが、そうではなくなっていた可能性もあるでしょう。現在では、佐竹の乱（山入の乱）といった争乱よりも、むしろ部垂の乱を克服できたことが、佐竹氏が戦国大名化する上で大きな意味を持っていたという位置づけもされており、こうした学説の検証なども必要でしょう。

　これらを具体化する作業として、例えば、常陸大宮市域は城郭遺跡が非常に良く残されているため、すべての発掘調査はできないにしても、現地踏査を含めた縄張り調査が欠かせません。あるいは、寺社や信仰に関わる遺跡の中に、佐竹氏の刻印が非常に強く刻み込まれている感じがあります。伝承資料、特に分家や一族被官の家でまとめられた系図や家譜などの中に、佐竹氏に関わる武士の家で伝承された世界がどのように広がっているのか、近世史部会とも相談しながら、調査・採録を進めたいと思います。

　もう一つ、指摘したいのは中世道の問題です。なかでも依上道（よりかみみち）は注目されます。近世には南郷道（なんごうみち）と呼ばれ、近年、少しずつその姿が明らかになっています。現在、那珂市で下大賀遺跡の発掘調査が行われていますが、そこから中世の三間道（さんげんみち）、幅五～六ｍという規模の非常に立派な中世道が発掘されました。おそらくこれが中世の依上道の一部なのでしょう。この依上道は北畠親房の発給文書などにも登場しており、白河と常陸国を戦略的に結ぶ道として機能していたことが知られています。東海道と東山道という日本列島の大動脈を形成する幹線道路と同じくらい重要な道と記述されています。そのルートに一部重なるで

高部城跡（高部地区）

現代に残る南郷道（山方地区）

あろうと思わる道が、直線道路で五～六ｍという非常な大きな規模で、しかもかなりの長さで発掘されたということです。常陸大宮市を通る道の全てがそういう道であったとはとても考えられませんが、中世の依上道の姿を考え直す非常に重要な問題を提起する調査成果なのではないでしょうか。常陸大宮市歴史民俗資料館では、すでに近世の南郷道を復元したすばらしい展覧会を実施しています。今回発掘されている道路は、近世以降のルートと少々ずれている部分もありますので、南郷道、そして依上道の位置づけは、常陸大宮市の歴史を復元する上で非常に重要な課題になるだろうと、関心を深めています。

石井：考古学のほうではいかがですか。

鈴木：これまで私が関わった自治体史では、最初は分布調査から始めていました。悉皆（しっかい）調査に近く、地表面が見えている所は全部歩き、遺物を採集する調査です。採取された遺物で、その時代の遺跡の存在が推定されることになります。合併以前の、自治体の面積が小規模な場合には分布調査が可能ですが、今回の常陸大宮市は面積が広大かつ、その大部分が山地形、森林に覆われているため、市域の大部分が分布調査の困難な地域となっています。逆を言えば、山に形成された遺跡が守られているということになりますが、資料の実態としては白紙です。全域で試掘調査を実施するのはそれこそ難しいので、現在判明している遺跡や遺物について、その記録と評価を重視する方向で考えています。

考古資料には埋蔵文化財という呼び方もあります。旧町村史の場合、埋蔵文化財として発掘調査された資料が少なく、例えば、『大宮町史』では分布調査を基礎として、個人蔵の資料を調査し、図化していく方法を採用したのではないかと思います。ところが、近年になると埋蔵文化財の発掘調査が市域内で急増しました。特に三美（みよし）地区では、畑地整備事業によって広範囲が遺跡の記録保存の対象となったため、膨大な量の遺物が出土しています。埋蔵文化財では、行政的な発掘調査が終わったら速やかに報告書を刊行する必要があり、時間や予算に厳しい制限があるため、報告書に掲載されなかった資料が山積みにされてきているというのが現状です。常陸大宮市でも状況は同じで、それをもう一度、各時代の専門家の目を通して資料化し、考古学の資料集を作成していく方向で進めています。旧自治体史の資料や、古い発掘調査の報告書に掲載されている資料についても、その所在を明らかにすることも含め、市史を刊行する時点で、この資料は確かに常陸大宮市に所蔵されているということがわかる資料集にしたいと思います。もう一つは、これまで発掘調査の対象とならなかった遺跡や古墳の中には、採取された遺物や地表面の観察から様々な憶測が生じている遺跡もあるので、市史編さんのなかで小規模でも発掘調査を実施し、実態を確認していきたいと考えています。

常陸大宮市の地域で特に注目すべきはメノウという石材です。どうやら縄文時代～弥生時代の一部にかけて、メノウに熱を加えて割り、石器を作るという独特のテクニックを開発しているのですが、いつ、どこで成立したものなのか、いつまで続いたのかが解明されていません。千葉県で出土するメノウの中に、このメノウではないかと見られるものがあります。また、泉坂下遺跡を調査する発端になった石棒も、日立変成岩、多賀山地の粘板岩を石材として粗く形を整えてから、泉坂下遺跡に持ちこんで仕上げているらしいということが分かってきました。これも、千葉県のほうに流通しています。逆に、遠隔の地域から持ち込まれたものには、黒曜石やヒスイで作られた製品が知られています。ヒスイは、新潟県の糸魚川あたりから来ているのですが、同じように土器も来ているのではないかと思い、その製作地域を突き止めようと調べたら、魚沼地方の土器に良く似ていることがわかりました。地元の研究者に見てもらい、「ここの土器と違和感ありませんね」

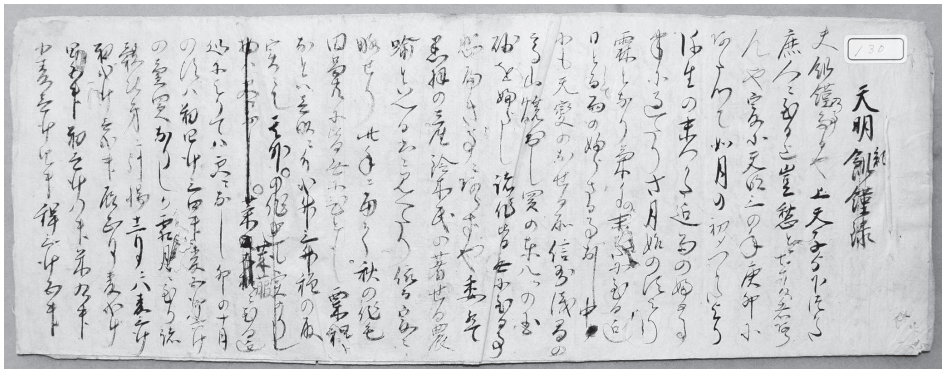
とアドバイスをいただいた土器が坪井上遺跡から出土しています。このように、他地域と交流を行い、生活が成り立っているというのはどの時代にも共通すると思いますので、そういった資源利用の実態や、人どうしの交流の実像みたいなものに少しでも迫っていければと考えています。

石井：近世史部会は、いかがでしょう。

添田：自然と人間が織りなす、豊かな時代としての近世に注目したいと思います。現在はのどかな農山村としてのイメージが強い常陸大宮市ですが、近世は少し違った風景が広がっていたと考えています。

たとえば、元禄一七年（一七〇四）二月に作られた下檜沢の「人数改帳」を見ますと、人口が一二八七人、馬が一五五頭で、人・馬ともに現在の数より多いのです。また、江戸の水戸藩邸や水戸の藩士家など町場での奉公に出ている者が四六人、さらに近隣の村との間での奉公人の出入りも数多く見られます。柔軟な職業選択の可能性と貨幣経済の浸透がうかがえるとともに、奉公人を介して江戸や水戸の都市文化や知識・情報が流入していたであろうことも推測されます。注目すべきは、村内に七〇歳代が三七人（男一八・女一九）、八〇歳代が一〇人（男二・女八）、そして九八歳の男性が一人確認できることです。同じ下檜沢では、寛政七年（一七九七）一二月、元禄九年生まれで百歳の女性が「至極達者」「珍敷長寿」の者として報告されています。平均寿命が五〇歳に満たなかったと言われる時代、下檜沢は高齢者が安心して暮らせる、豊かな地域だったと考えてよいのではないでしょうか。

その豊かさを支えたのは自然の恵みでした。生業に目を向けると、農業や漁業はもちろん、和紙の生産を支えた楮をはじめ、諸沢の火打石、コンニャク、高部の材木など多様な産業がありました。地元で生産・採取したものを特産品として加工し、陸上交通はもちろん、那珂川・久慈川・鬼怒川などの河川交通も利用して幅広く流通させることで、百姓のふところは潤ったのでしょう。そして、永田茂衛門らによって久慈川に築かれた辰ノ口や岩崎などの江堰に代表されるように、自然をコントロールする技術も開発され、自然の恵みを持続的に再生産し、享受できるしくみを整えていったのです。そうやって百姓が蓄えた富は、大名の政治や経済にも影響を与えるまでになっていたのではないでしょうか。たとえば、下檜沢の豪農・小室家は、寛政六年（一七九四）一二月、烏山藩に金二〇〇両を月一割の利息で貸し付けています。一方、高部の岡山家では、天保一二年（一八四一）八月、水戸藩の「御武備御引立」のために「御国恩軍馬」として一八〇頭を上納し、これを水戸城下近郊の百姓に貸し付けて世話をさせる仕法を提案しています。



天明飢饉録（下檜沢地区、小室家所蔵）

ただ一方で、土砂崩れや洪水、獣害などのように、自然が人びとのくらしを逆に脅かす事象も確認できます。天災と呼ばれるものは、多くの場合、人災との複合的な災害です。近世の場合、その最たるものが飢饉です。干ばつや長雨などの異常気象も大きな原因ではあるので

すが、それ以上に、人びとの経済活動が影響しています。とくに、米価の高騰を受けて、百姓たちが自分で蓄えていた米をお金に換えたり、お米より儲かる商品作物を育ててみたりと、目先の利益を優先して大事な食糧の備蓄を怠ってしまうことが増えていた社会状況は見逃せないでしょう。前述の豪農・小室家には『天明飢饉録』という文書が残されています。これには、当主が下檜沢で経験した天明飢饉、地震や洪水等の自然災害、上小瀬村で起こった「数万の蛍」の大量発生といった「怪異」現象などが記されています。この記録が興味深い点は、飢饉のなかで百姓たちが生き抜く工夫や、現状を打開しようと努力する様子も描かれている点です。非常食の「葛子」「わらひ（蕨）」「かつら（葛）餅」などの記述もあります。近世の百姓は、危機的な状況に甘んじていたのではなく、具体的な策を講じて対処した上で、自らの経験を次世代に伝えようと腐心していたのではないでしょうか。近世の災害観や社会適応のあり方を考える上でも、重要な史料だと考えています。

なお、近世史部会では、より充実した市史の執筆のために、市内に眠る歴史資料の発掘も必要と考えています。これには、地元の皆さまの協力が不可欠です。市史編さんの事務局や常陸大宮市文書館、近現代史部会や民俗部会はもちろん、地元の歴史研究会や旧町村史の編さんに力を尽くされた先達の皆さま、そして地区のリーダーの皆さまのお力添えを乞う次第です。

石井：続いて近現代史部はいかがですか。

佐々木：先ほども話したように、ペリリュー島やインパール作戦に関する戦争体験には、まだまだ十分に取り上げられていないことがあると思います。戦没者名簿を見て、これは掘り起こさなくてはいけないと思いました。

また、明治初期に起こった小瀬一揆（那珂郡一揆）の歴史的性格を、しっかりと見定めていくことが肝要であると思います。茨城県内でも一八七〇年代から自由民権運動は起こってくるわけですが、一方で、近世以来の百姓一揆の形態を引き継ぐ民衆の動きも、断続的に起こっていきます。これをどのように整理するかということです。小瀬一揆に関する資料を見ていくと、彼らが目指したものは一体何であったのか、安易には判定できないことに気づかされます。たとえば一揆勢は、「徳川御用」という旗印を掲げるわけですが、この意味をどのようにとらえるかは非常に難しい課題です。彼らとしても、すでに倒れてしまった徳川幕府を再興することが困難であることは分かっていたのではないかと思いますが、かといって、できて間もない明治新政府の権威が確固たるものとして理解されているわけでもありませんでした。一揆勢は近代的な権力を呪詛し、近世的な「お救い」を期待しているようにも見えますが、他方で一揆の指導者である本橋次郎左衛門（次左衛門）や鈴木教善のような人物は、もう少し冷徹に現実を見ているようにも思えます。この端境期の出来事の位置をしっかりと見定めることで、近代以降の歴史の見え方が変わってくるように思います。

資料の面については、メディアの発達という観点から柔軟にとらえていくことが求められていると思います。先日、本部会の佐藤美弥専門調査員が、戦前の大宮の街並みが分かる「大宮町協同商店写真集双六」という資料を発見し、紹介（一〇六、一〇七頁に掲載）してくれましたが、大衆社会が拡大していく状況のなかで、常陸大宮市域でもビラ・チラシといったメディアが日常生活の中に入り込むようになってきたことが分かります。また、特に昭和以降になると、カメラの普及が進みますので、写真をいかに有効に活用していくかが課題となります。さらに、高度経済成長期や一九七〇年～八〇年代になると、各家庭でビデオカメラを持つようになります。家族の姿を撮影し

た映像などをどのように資料として活かしていくのかについても考えていなければいけません。そういった面でも、今回の市史編さんでは一九七〇年代以降のことが大事になってくると思います。

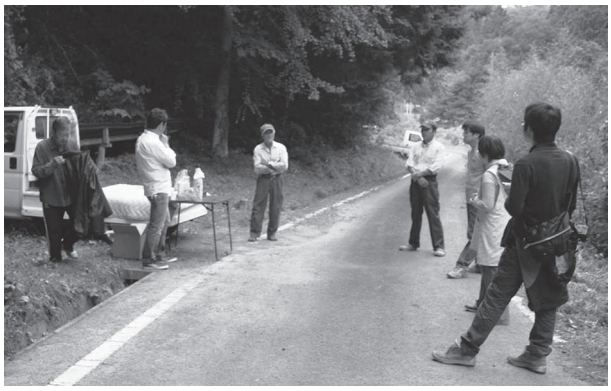
石井：ありがとうございます。民俗部会では、今年の夏あたりから、現地に入って地元の方の話を聞くような機会が何度かあったと思います。そこでの経験を踏まえて、いかがでしょうか。

大津：民俗部会では、四月からこの半年間、一〇回ほど地域に入って調査を実施しております。まず、民俗部会の基本的なスタンスから話します。先ほど鈴木先生からもお話がありましたが、常陸大宮市は非常に広く、自然豊かな場所です。これは好条件である一方、全域で綿密な調査をするのには広すぎるという問題もありますので、なるべく現地の概要をつかむことから始め、ポイントとなる地域を絞ってから現地へ入っていこうと考えています。そのため、国勢調査や農林業センサス、国税庁の調査、茨城県立歴史館で所蔵している行政的なデータ等を利用して数量的なデータをきちんと把握し、客観的なデータで裏づけながら、従来の民俗調査を加えていく方法を採用する予定です。

また、写真は非常に有力な資料になります。幸いなことに、現在常陸大宮市出身の民俗学者である藤田稔先生が撮影した写真資料約二万点を茨城県立歴史館に寄託していただいています。そのデータ化がまだ終わっていないのですが、データ化と並行して、内容を確認し利用させていただく予定です。また、常陸大宮市内における最初の調査でお世話になった方から積極的に古い写真収集のお手伝いもいただいています。大変ありがたいことです。写真資料については、客観的な資料として取り上げていく予定です。

添田先生がお話しされていましたが、自然を含めた環境によって生業の変化が見られます。特に、山沿いの地域で生産される和紙などは、生産地から売り出すことによって、周りの地域との流通が興ってきます。茨城県にかぎらず栃木県域などまで含め、地図を利用した流通状況の把握や、そこから更にその地域との民俗の関連、信仰・行事や年中行事まで触れていきたいと考えております。単なる聞き書き調査だけではなく、数量データを使いながら、客観性を重視した民俗調査を実施したいと考えています。

もう一つ、実際に調査をしていて驚くことは、市域に住んでいる方の個人や地域の記憶力が非常に高いということです。こんなことは聞けないだろうなって思いながら現地に入っていくと、聞いているうちに自然と戦前の話や、高度経済成長前の時代の話をしてくださるのです。忘れ去られていると思われるものが常陸大宮市では受け継がれ、記憶されているという事実があって、実際に調査現場で感動することが多くあります。全ての地域での悉皆的な調査は難しいのですが、地域を選んで民俗の基礎データを積み上げることは、学問的にも非常に貴重なのではと考えています。そういった地道な作業ですが、民俗部会は一〇年間という時間が与えられているので、遂行していきたいと思っております。また、一〇〇歳近い方で、たいへん記憶力が良く、お話をしてくださる方がいますが、一方で「もう少し前だったらそういう人が居たんだけど…」という問題にも直面しています。なるべく迅速にお話しを伺いに行くということもあわせて考えていきたいと考えています。そして、現地の調査にあたっては、私た



山の神行事の調査（鷲子地区）

ちだけでは不足する部分が出てくると思います。資料においては添田先生や佐々木先生にご相談させていただいたり、あるいは大学の学生等に力を貸していただき、基本的な民俗調査のデータ集めをやっていただくことも考えています。さらに、先ほど話題に上げましたが、非常に記憶がしっかりした方や、地域のことに興味のある方がいらっしゃいますので、そういう方のライフヒストリーなどを幾つか記録できたら素晴らしい資料になるのではないかと考えながら、調査を進めております。

石井：自然部会の方々も今年から調査をはじめ、精力的に活動していただいています。自然部会ではいかがですか。

桐原：私は地元に住んでいるので、常陸大宮市の大きな変化として、かつてのことを知る人が少なくなってきている今の地域の状況があると思います。地域の行事や祭礼を知っている方が少なくなりました。

また、お子さんも少なくなり、地域にあった子安講もなくなりました。先日、氏神様の祭りがありましたが、跡継ぎの人たちが祭礼の日に仕事に出ているため、徐々に成立しなくなってきています。それと、常陸大宮市域は町村合併が何度かあったところです。先ほど道の話が出てきましたが、町村合併のたびに人が使っている道が変わります。例えば、私の住んでいる所は旧塩田村で、西塩子、北塩子地区と一緒のはずなのですが、合併の際には旧山方町に入りました。すると、直接塩子まで行く山の道が、今はもう通れないような状況になってきてしまいました。

今、様々なことが変わりつつあるのだろうと思います。今がちょうど転換点になっているからこそ、市史を残すことがすごく大事なことは言うまでも無いことだと思います。文字・資料として残す常陸大宮市の姿と、現在進行形で消えつつある常陸大宮市の姿の境目あたりに自分がいるような気もします。市史として文章に残すにはあまりにも身近で、「今」過ぎるため、残せないこともあると思います。しかし、今残さなければ、永遠に失われてしまう。現在失われつつあるものが、「人のうごき」や「道」の変遷、写真等である程度見えてくれば、市史の刊行後に誰かが物事を調べる際の手掛かりになってくれるのではないかと考えています。

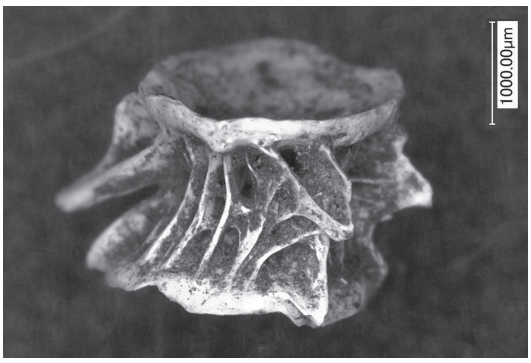
自然部会に関連することでは、例えば農業者は、ドジョウの養殖が良いと聞いて、実際にドジョウを養殖していました。隣の那珂川町ではフグの養殖が行われています。久隆地区でもカジカを養殖していました。その際、従来と異なるドジョウ等が河川に入っていて、「なぜここにこんなものが」となることがあります。こうした人的・歴史的な変化が自然の変化へとリンクしているところをどう記録に残すか、表記するかは一つの課題です。

また、自然を捉えるとき、「この種がここにいるのはこの要因だ」とはっきり言える証拠は直接出てきません。自然の変化と歴史の変化、民俗の変化はリンクしているはずなのですが、自然関係の視点からでは気づくのが難しいものです。データが集まってきているので、部会で検討を進めたいと思いますが、難しいところだと思います。

異なる分野との連携・協力

石井：今後、各部会がそれぞれ資料編を刊行するわけですが、将来的には総合的な通史の刊行を予定しています。お互いに情報交換することによって、各部会で調べていることの厚みが増すと期待できることや、他の部会に対する希望や提案があれば、この場で出してみてはいかがでしょうか。まず、多くの部会とつながるであろう、考古部会はいかがでしょうか。

鈴木：自然部会の稲葉修調査員にあるものを預けて調査を依頼しています。泉坂下遺跡をはじめ、遺跡を発掘した際に出る土を洗うと細かな



魚の脊椎骨（泉坂下遺跡出土）

ものがたくさん見つかります。人間の目は、二㎝より小さいものは見落としやすいため、土をメッシュの上で水洗いし、残留物を選別するということを行いました。泉坂下遺跡の場合には、石器を作る時の細かなクズ等がたくさん出て来たほか、発掘の際には見過ごした石鏃なども出てきました。興味深いのは、タイ（鯛）の歯など、魚の骨が見つかったことです。魚の脊椎（せきつい）骨も検出されたのですがその種類がわからないので、淡水魚に詳しい稲葉さんにお願いしたわけです。ただ、生物としての魚類が稲葉調査員のご専門であるため、骨から同定するのは少々厳しいと思いつつ、もし分かったら良いなというくらいの気持ちでお渡ししています。

考古学では遺跡から検出された動植物から当時の生活を考えていく手法があります。例えば、植物の場合は、土器に残った種子の圧痕からレプリカを作成して、種類を同定することも行われています。また、植物の種子が水洗選別の残留物として検出されることも多く、これらの種子が栽培種であるのか、あるいは野生種かということが問題になります。このように、動植物と人間の生活との関わりという視点で見ることが盛んになってきました。しかし、先ほどもお話しましたが、他分野の研究者に調査を依頼しても、分野によって調査方法が異なるため、なかなか難しいことも実感しています。例えば、石器に関して、考古学では石材の産地を推定することが重要です。産地を出発点にして、人間がその資源をどのように利用し、製品が流通するのかという研究テーマが設定されます。安山岩と同定されても、無数の穴がある多孔質安山岩や、割るとガラスのような割れ口をみせる安山岩があるように、その性状は多様なものです。安山岩というだけでは産地までを推定することはできないのです。観察や蛍光Ｘ線分析、あるいはプレパラートを作り、多くの石材標本と比較して初めて産地を特定するという手順になるので、これも単純に地質学の研究者に訊くわけにもいかないだろうと実は思っています。その一方で、一緒に仕事をしていきたいという気持ちもあり、実際にどこまで一緒に出来るのかを手探りしている状態です。

石井：他分野とのキャッチボールみたいなところで、高橋先生はどのようなことを期待されますか。

高橋：考古部会では、考古学の方法論に基づくスタンスをとり、原始・古代という時代の枠に捉われない分析をしていただくことになりました。そのメリットを活かしてもらいたいと思います。共同で議論しながら進めていくことは大事ですが、変に文献史学の側からの歴史像に接合して、おかしな話にならないよう注意しなければなりません。考古部会の方には、考古学者の視点からそれぞれの遺跡を評価し、歴史像を提示していただきたいと思います。その点はお互いに意識したいところです。

先ほど話題に出た下大賀遺跡では、馬の頭骨が出土しています。中世の交差点跡のような場所の底には獣骨が発見されました。切り落とした馬の頭が何箇所も納められ、銭も納められている。このことを、民俗部会の方はどうみるのか。有益な意見交換がここでもできるのではないかと思います。このように一つ一つ、事象に即して相互に検討できたらと思います。

石井：近世史ではいかがでしょうか。

添田：他の部会との連携は欠かせません。たとえば、人や物の交流とい

うことで申しますと、もちろん近世でも盛んだったことが帳簿や日記などで確認できます。しかし、記録として残されているやりとりはごく一部だと考えています。そのようななかで、重要なのは大津先生の民俗部会の成果になると思います。

私たちも調査で蔵の中に入らせていただくことがあります。すると、大抵の場合、古文書はわずかで、大半は膳椀類や骨董品、農具などの民具と呼ばれるものです。民具については門外漢ですが、近世の膳椀類について言えば、冠婚葬祭など、大切な節目に揃えるものです。そのような意味では、当時の人たちからすると、膳や椀は、私たちが考えている以上に思い入れの深い品物だったのかもしれません。では、膳や椀からどのような情報が読み取れるのか。膳や椀が収められている箱には、いつ、どこで買ったのか、何に使ったのかということがくずし字で書き付けてあることがあります。しかし、そのような文字の記載がなかった場合、私は正直何も読み取ることができません。ところが、民俗学の専門の方に見てもらうと、漆器の材質や形状から、産地がどこで、誰の手によって作られ、どのような経路をたどって送られたものなのか、といったことが明らかになることもあります。

同じようなことは美術品にも言えます。蔵を開けると、当主の喜寿などのお祝いに、色々なところから書き寄せられた絵や書を貼り混ぜたような屏風が見つかることがあります。絵や書はもちろん、それらに添えてある賛や落款は、当時の文化的、あるいは学問的な交流の広がりを示しています。私は美術の素養も全くなく屏風の前で立ち尽くすだけなのですが、民俗学や美術史の専門家に一つずつ見てもらうと、実は江戸や大坂、京都といった中央画壇の有名な画家や高名な書家が描いたものである場合もあります。現在の風景からは想像できないような人脈、文化的なネットワークの広がりが明らかになるのです。

このように、膳や椀も美術品も、文字という形では残らない、近世の人びとの日常的な営みや交流の具体像を知ることができる大事な手がかりになります。そのようなところで民俗部会はもちろん、専門の分野を超えた多様な交流と連携が不可欠だろうと思います。

石井：では近現代部会はいかがでしょうか。

佐々木：近現代史部会の場合、近代以降の政治・社会・経済の目まぐるしい変化が前提にありますので、他の時代などとは、なかなか連携が作りにくい分野になってしまうかもしれません。しかし、古代の歴史を二一世紀に生きる我々が書いたり論じたりするように、近現代の時代に、前の時代の記憶や歴史が「生産」される例がたくさんあるだろうと思います。近現代という時代を生きた人びとが、それよりも前の時代の歴史の何に注目し、残していこうとしたのか。水戸黄門の歴史にしても、佐竹氏の歴史にしても、それを叙述する時代の性格が反映されているはずです。そういった意味で、それぞれの時代の先生方と一緒に資料を見ながら考えていくことができるのではないかと思っています。

民俗部会ではすでに聞き取りを始めているということで、私たちの部会でも聞き取りを始めないといけないという話をしております。近現代史と民俗では聞き取りのポイントが全然違ってくると思いますが、その成果は共有したほうがいいのではないかとも思います。私たちは政治や経済を中心に話を組み立てていくことが多いかと思いますが、多様な聞き取りの成果を組み合わせて近現代の歴史を蘇らせ、最終的には叙述に組み込んでいけたら面白いと思います。そのあたりの知識や方法を含めて知りたいので、ご指導をいただけるとありがたいと思っております。

石井：だいぶ皆さんの期待の高い民俗部会はいかがでしょう。

大津：添田先生からお話しがあったように、蔵に入り、そこで二〇人揃え、三〇人揃えの漆器が見つかったら、「これはどういう時に、どの

ように使ったのですか」と聞き取りをしたり、箱の書き付けを読むこともあります。しかし、現地では、読み切れないというのが現状です。文字を読むことができれば、客観的な内容を知ったうえで聞き取りを出来るのに、文字を読みきれないために情報を取り落としているのではないかという不安が付きまといます。お互いに得意なところを調査するという形であれば、共同で蔵を調査するといったように協力していくのが一番良いと思っております。

佐々木先生のご提案については、私たちも同じような時代を取り扱いますが、事件とか政治について、話者との関わりを深く聞くようなことはありません。しかし、それらが背景となり、生活や考え方が変わったということは当然あるでしょうから、お互いが深く関係する分野については調整し、相互に情報交換をしながらやっていければ良いと思います。しかし、まとめの段階、例えば、写真集を作るとなった時には、民俗部会の考え方のなかで写真集や資料集を作っていきたいと考えています。そういう点では、事件や政治に関係がある写真は近現代史部会にお願いするなど、住み分けはしていく必要があるだろうと考えています。また、話が変わりますが、自然の分野、例えば木や石、岩の違いは重要なのですが、話者から説明を受けても、充分に理解できないことがあります。自分の勉強不足なのですが、そういうことを自然の先生方にご指導していただければありがたいと思っています。現在、調査の日報を事務局に提出していますので、それを確認しながら声かけをいただくというのも一つの方法かと思います。

石井：近世史部会と近現代史部会は、近々合同調査を検討しています。他の分野に関しても希望がありましたら、是非お話いただければと思いますが、いかがでしょうか。

高橋：さきほどの三人のお話を聞いて感じたのですが、近代になって発展した学問は、それぞれの分野に即して資料群を分類してしまいます。しかし実際には、美術品や古文書、民具、写真資料、あるいはそれに即した伝承などが、一緒に同じ建物の中に納まっている。資料の伝来の場面性や場所性のようなことも問題にして、相互に関連付けながら個々の資料を分析しなければいけない。資料に歴史を語らせる時には、場面や場所に注目して復元する必要があるのではないかと思っています。

「郷育立市」と『常陸大宮市史』

石井：常陸大宮市では、昨年の三月に「郷育立市宣言」を行いました。この宣言は、郷土で活躍する人材の育成を掲げたもので、郷土を知る、すなわち先人達の歴史を受け継ぐことが地域で輝く人材の育成につながり、ひいては街づくりにつながるというスローガンとなっております。この「郷育立市」は市史編さん事業と親和性が高く、市史編さん事業開始の機運を高めました。そこで、現在の常陸大宮市で市史編さんをおこなうということは、「郷育立市」という立場を踏まえてどのような意義があるでしょうか。また、「郷育立市」とのつながりと、常陸大宮市史を新しく作る意味について、先生方にお話をお聞きしたいと思います。それでは、高橋先生からお願いします。

高橋：常陸大宮市は「郷育立市宣言」を公にしました。これは、市政の重要な柱として「郷育」重視を明確にされた点で、非常に画期的なことでしょう。そのなかでも、人づくりを重視するという点で独自性があり、特に、今の世の中でそれを打ち出すのは大変大きな意義があると思います。市史もその中に位置づけていく必要があると思います。

この宣言を改めてよんでみると、故郷の先人とのつながりということから、故郷への愛情を育んでいくという論理で文章がまとめられています。市史との関係において私たちの立場から言えば、やはり受け継ぐべき先人の行いとは何かを明らかにすることが、常陸大宮市史の

役割になると思います。もちろん、その中には誇るべき歴史もあれば、辛く苦しい歴史もあることでしょう。私もその通りだと思いますが、そうした先人の行いについて、反省しつつ考察する必要性も訴えておきたいと思います。漠然と郷土愛が先行するのは矛盾であって、「郷土とは何か」を客観的に正しく学んだ上で、愛すべき郷土を認識することになるはずです。私も、尊重すべき先人たちの行いがこの地にはあると思っています。この点が、「郷育立市」宣言を市史と関わらせる上での一つのポイントになるのではないでしょうか。自治体史は、「郷育立市」の志を根拠づけ、あるいはそれを検証するという位置づけになるわけです。そのため、誰かに都合のいいような叙述だとか、耳に優しいだけの叙述で構成してはいけないと思っています。より客観的、中立的、科学的に、故郷とは何なのかを解明し、叙述していきたいと、この宣言との関係で強く思います。

石井：続いて、近世担当の添田先生いかがですか。

添田：「郷育立市宣言」を実質化するために、市史編さんの取り組みのなかで何ができるのか、ということを考えています。とくに、近年の自治体史編さんは、本を作って終わりではなく、自治体史を通じて新たな地域の魅力を発見し、それをまちづくりに活かしていこうとする事例も報告されています。ポイントは、地元の人びとが活躍できる編さん事業をどうやって組み立てるかということだと思います。

　たとえば、兵庫県姫路市の北、平成の大合併で消滅した香寺町では、平成一〇年（一九九八）から『香寺町史』の編さんが進められました。通常、自治体史編さんは、地元の郷土史家が中心となって編さんを進めるか、外部の専門家や研究者に編さんを委嘱するかのどちらかになると思います。しかし、『香寺町史』は、それまで歴史や文化に携わってこなかったような人たちまで参加する取り組みになった点が特徴的です。編集の基本方針には、町民は単なる読み手となるのではなく、広く町民が参加する町史作りを行い、その結果、町民の要望に応えられる町史としなければいけない、といったことが謳われています。全四巻の町史のうち「地域編」は、地域の景観や生業、信仰など、地元での日々の暮らしに馴染みの深い分野について、地元のみなさんが自分たちの手でまとめたものです。七、八年かけて一〇〇〇ページ以上の大部の町史を作り、結果完売をしたといいます。

　興味深いのはその後の展開です。香寺町では、自治体史編さんが終わった後も、町史を執筆した人びとが中心となって、自分たちが暮らす地区の調査や、史跡の活用を始めたのです。地元の魅力を、自分たちで掘り起こす取り組みです。たとえば町史編さんの過程で発見された古写真をつかった写真展、それらの写真を見ながら昔話を語る会を企画したり、あるいは中世の山城や古墳の調査を始めたり、地元に溜め池を作った先人を顕彰する碑を建てようという企画もありました。活動の経費は、各地区の自治会の予算で賄われていたようです。

　もちろん香寺町のような取り組みを実現することは、なかなか難しいとは思います。ただ、地元に暮らす人びとが自分たちの手で地元の魅力を発掘し、それを次の世代に伝えていくことができる環境としくみを作ること、それも「郷育立市」の理念を具現化するために、市史編さんが果たすべき大事な役割のように思うのです。

石井：佐々木先生はいかがでしょうか。

佐々木：日本社会全体もそうですが、二〇二〇年代の常陸大宮がどうなっていくのかということを想像するのは、とても難しいことです。近現代史の立場からすると、高度経済成長期以降の大きな流れとして、都市への人口集中とそれに伴う農村の過疎化という問題が出てきます。常陸大宮市として、この問題とどうやって向き合うのかは大事なこととしてありつづけてきたわけですし、今後も問われつづけると思います。そして、その状況を考えた時に、戦後史という時空間のな

高部宿の街並み

かで、変化していく社会を見据えながら、この地域の人たちがどのようによりよい社会を目指して格闘してきたのかを、うまくいったことだけでなく、うまくいかなかったことも含めて、一つ一つ丁寧に描いていければ、と個人的には思っています。「郷育立市」との兼ね合いで言うと、この地域にはたくさんの誇れる文化財があると、この仕事を始めてからあらためて実感しています。近現代という時代に限っても、高部宿の街並みなどはとても趣深く、価値がある財産だと思いますし、多くの先人が守り、語り継いできた小瀬一揆の史跡なども、もっと広く知られてよいものだと思います。ただし、その一方で、近現代では成長・発展だけでは語れない、多くの辛い歴史があります。戦争はもちろんのこと、人口流出が続いてきたという現実も、辛くて悲しいことかも知れません。そう考えると、誇りは誇りとしてしっかりと描きつつ、誇れないことについても描かないといけないことがあるかと思います。郷育立市につながり、今後のまちづくりにつながっていくような素材を、歴史のなかに見出し、いいことも悪いことも含めてちゃんと伝えていける、そのような形になればと思っています。

石井：考古部会はどうでしょうか。考古学の分野では、地元で出土した遺物や文化財を使った授業やワークショップが盛んに行われるなど、教育普及活動との結びつきが強い学問ではないかと考えられますが、「郷育立市」のなかで考古部会が果たす役割とはどのようなものが考えられますか。

鈴木：文化財など歴史的な遺産は、その地域が持つ資源の一つだと考えます。その資源を「郷育立市」では、学校教育や、地域振興にも活用していこうというわけですから、基礎となる資源の価値は、確かなものでなければなりません。冒頭でお話した前期旧石器捏造事件のようなことがあってはならないわけです。歴史的な遺産の価値を確実なものとして明らかにしていくことが、市史編さんの役割なのであろうと思います。

石井：自然のほうではいかがでしょうか。

桐原：「郷育立市」に関して考えるのは、市民が常陸大宮市に対し、どのような「印象」・「思い」を持っているかです。

地元に住んでいる人にとっては、「何もないところ」というのがこの市への一般的な評価だと思います。鮎とか、秋のキノコなどがあるため、常陸大宮市外の都市部に住む方などは「素晴らしい」と思うのでしょうが、市民は必ずしもそうは思っていません。「郷育立市」が成立するには、「自分たちが住むところはこんなに良いところである」という再確認が前提として必要なのではないでしょうか。

自然部会との関連でいえば「水と緑」、「山と川」が大きなテーマ、ポイントになると思います。例えば、常陸大宮市は茨城県のなかでも、南方や北方に生育する植物すべてが揃っており、那珂川と久慈川が存在しています。それにもかかわらず注目されないのは、むしろあまりにも揃いすぎているからかもしれません。

久慈川、那珂川とも、とても綺麗な河川で、国土交通省の平成二七年「泳ぎたいと思うきれいな川」でAランクに入っていますが、市民の方々はあまり興味がない、当たり前と思っているように感じます。市史編さんを通して、常陸大宮市は「何もないところ」と言えるほど、「水と緑」、「山と川」、自然が豊かな土地なのだということを市民の方に理解してもらいたいと思います。

常陸大宮市で生まれ育った人の多くは、やがて外、都市部に出てし

まう。「自分達がここにいて、将来はどうなる」というように、地元に残ることに将来への見通しを見いだせないということもあるでしょう。地元に誇りを持たせ、将来への希望を与え、そして大事にされているという意識を育てることが一番最初の「郷育立市」であると考えています。

もう一度繰り返しますが、今回の市史編さんや調査を通して、常陸大宮市には自然がこんなに揃っているのだということを周知し、再発見していただく必要があるでしょう。久慈川も那珂川も含め、豊かな自然、「山と川」、「水と緑」を再確認していただき、常陸大宮市の「素晴らしさ」に誇りを持っていただきたいと思います。

石井：自然部会では、市民の方が当然のように思っている暮らしを取り巻く自然の価値に気づき、再確認して欲しいということでしたが、その自然と関わり、人々の暮らしを見つめる民俗部会ではいかがでしょうか。

大津：私の個人的な意見ではありますが、自分が職業として文化財行政に何年も携わっていますと、行政的な立場からも考えてしまいます。今日の文化財行政を考えるとき、人口の流出や高齢化による地域のコミュニティの解体、あるいは財政難というなかでは、文化財行政を積極的にやろうとしても出来ないのだという言い訳をしてしまうような、本来は好ましくない状況が実際にはあると思います。そのなかで、市史を編さんすることの価値を見出し、長い時間をかけて作ることを決定してくださった常陸大宮市には大変感謝しております。

市史編さんの調査で地域に入って行きますと、「私たちは自分たちのことを、自分たちのまちの事を知りたいんだ」という方と出会います。また、「私たちは何でこの行事をやっているんだろうか。ちょっと前のことは分かるけど、その前のことは分からない。このあとの事も不安だ」と言う方もまた、数多くいらっしゃいます。先日も調査の折りに質問攻めにあいました。「他の地域はどうなっているのだろう」、「他のところはどういうのがあるの」というように。地域の文化に興味をお持ちの方や、今後の継承に不安をお持ちの方がたくさんいらっしゃるのです。財政等の諸問題をできない理由とせず、市史を作り、読んでいただくことは、さらに常陸大宮市の歴史や文化を良く知ってもらうことであり、市民のニーズに応える大変有用な政策ではないかと思います。つらい歴史というものもありますが、それも含めてよく知っていただくことが、私たちが市民の方から求められている答えに繋がっていくのではないかと思います。そして、文化財行政を市民の方が積極的に支えてくれることに繋がるのではないでしょうか。「こういうことならばこうやろうじゃないか」、「この文化では、こういう意味があって続いてきている。ならば、それを支える運動に入ろうじゃないか」、そういう動きに繋がるのではないかと、実際に肌で感じるのです。

「郷育立市」という市の方針のなかで、自分たちが市史編さんをすることが、市民の方々と一緒に文化財を考えるということに結びつけば、市史をつくる大きな意味になるでしょうし、市の文化財、ひいては常陸大宮市自体を大事にしていく機運になるのではないかと思います。

高橋：大津先生のご意見、おっしゃるとおりだと思います。今回、編さん委員や調査員の中には、若い研究者が多くいらっしゃいます。彼らには、新しい感性や問題意識を大切にして完成までやり遂げていただきたいと思っています。冒頭にもありましたように、常陸大宮市は五つの旧町村が合併することで誕生した自治体です。そして、各旧町村がそれぞれ自治体史をもっていました。今回の市史はただ新しいだけではなく、これまで地元で培われてきた知識の継承も目指していきたいと考えています。添田先生や大津先生の発言とも関わりますが、市

民との連携も非常に重要となってきます。私たちが学問的な方法で知ることができた知識や、整理した結果を地元の方たちに、その都度、還元していくということが大事です。その方法は様々なレベルで、かつ多様に取り組まれるべきだと考えています。市史ができてから還元するのではなく、私たちが調査を続ける傍ら、速報的に調査成果を還元していくことから始めていきたいと思います。

話すだけなら簡単なのですが、市民とともに自治体史を作るということをどう実践していくのか。添田先生が先ほど紹介していた、香寺町の事例まで達するには、編さん室や編さん委員の力量も問われると思います。そういう共同作業の部分をどうやって実現していくのか、今後の大きな課題だと思います。

石井：今の社会状況から鑑みると、地域力が徐々に低下しているのが非常に大きな問題で、これをどうにかしたいという思いを地域の方は持っているのです。そういうわけで、昔のような排他的な社会ではなく、「お話を聞かせてください」、「調査に来ました」というと、たいへん暖かく迎えてくださいます。聞きたい事もあるし、自分達が伝えたい事もある、というような状況がそこにはあるのだと思います。また、地域によっては、高部地区のように、自分たちの手で地域をどうにかしようと、積極的に人が集まっているところもあります。そういう意味では、地域の方たちに「一緒にやりませんか」と呼びかけるには、とてもいい時期なのではないでしょうか。お互いが自分たちの故郷を知りたい、知らせたいという思いがある時期だと思いますので、その思いをうまく汲み取って動いていけるよう、形を整えていければと考えています。それでは、時間も押してまいりましたので、高橋先生から最後に一言お願いします。

高橋：有意義な意見の交換会になったのではないかと思います。お疲れ様でした。

《研究ノート》

藤田稔写真資料仮目録―旧大宮町出身の民俗学者・藤田稔の民俗研究（一）―

林　圭史

常陸大宮市鷹巣出身の藤田稔（一九二二―二〇一三）は、茨城の民俗文化を全県域的な視野から網羅的に語ることのできた、最初の人物である。そして、質量の両面においてその業績に並び得る後進の研究の存在を、筆者は確認できていない。

藤田は、終戦後に進学した東京文理科大学で和歌森太郎（一九一五―一九七七）に民俗学を学んだ。和歌森は、歴史学者・民俗学者で、戦後初めてとなる社会科の日本史教科書の編纂に関わった研究者として知られる人物である。その後、藤田は茨城県の高校教員として教壇に立つ傍ら、自らが設立に携わった茨城民俗学会（昭和三八年発足）を主な活動母体として県内各地の民俗調査を行った。その過程で撮影された約二万点におよぶ写真フィルムは、現在、茨城県立歴史館に寄託されている(一)。その一部は、平成二八年度テーマ展Ⅱ「茨城の民俗学者・藤田稔のみた世界」において公開されたばかりである。そこでは、同時代を生きた民俗学者の視点で切り取った一枚一枚の写真が、生活文化の移ろいを見出すうえで有効な資料となることが提示された。さらに、来館者の反応を通して、昭和三〇年代以降という、感覚的にはそう遠くはない過去の資料が、異なる世代間の会話を生み出す契機にもなり得ることが確認された。

以上の写真資料を含む彼の民俗研究の手法や特長を、同時代における民俗学の動向との関連において検討するところに筆者の主な関心はあるが、小稿においては、その手始めとして、彼が遺した写真資料のあらましを紹介する。紙幅の都合上、撮影時期の情報がより細かく分かり、且つ、現在の常陸大宮市域に関係する写真を優先し、また、同一の行事を撮影したと判別できる複数のコマがある場合は、ひとつとして掲載している。極めて限られた範囲になってしまうが、これを一応の基礎データとし、考察はあらためて別稿を設けて行うこととしたい。

なお、藤田稔が撮影した写真については、詳密な研究が既に存在する。とりわけ常陸大宮市歴史民俗資料館で平成一七年（二〇〇五）に開催された展示会「民俗学者　藤田稔の視点Ｐａｒｔ Ⅱむら・ひと・くらし」とその展示図録では、藤田稔写真の内容分析と解説がなされている。拙稿もその成果に大いに拠っていることをまず明記しておくとともに、今回の仮目録掲載にあたり、その成果を利用することを快諾して下さった石井聖子氏（常陸大宮市歴史民俗資料館＝当時）に、紙面を借りて深謝申し上げる次第である。

註

（一）現在、茨城県立歴史館で保管する約二万点の藤田稔写真資料は、段ボールで二八箱に収納されており、そのうち、情報の正確性がある程度確認できたもの約二五〇〇点について仮目録の作成が完了している。資料の総点数からすれば未だ漸く緒に就いたばかりと言わねばならないが、市史編さん事業においても、当該資料のもつ可能性について検討することを継続的な課題と位置づけて取り組んでいきたい。

（民俗部会専門調査員・茨城県立歴史館副主任学芸員）

写真１　物置きの前で遊ぶ子供たち（ふたつの荷車）（表中№5）

写真２　民家とはね釣瓶（表中№22）

写真３　嫁入りの儀礼（表中№49）

写真４　葉タバコの連干し（表中№161）

写真５　タテマエ（上棟式）（表中№331）

写真６　六字様（表中№502）

写真１　昭和 30 年撮影／大宮町　　写真２　昭和 30 年撮影／大宮町
写真３　昭和 39 年撮影／大宮町　　写真４　昭和 40 年撮影／美和村
写真５　昭和 43 年撮影／大宮町　　写真６　昭和 46 年撮影／緒川村

（茨城県立歴史館寄託資料）

表　藤田稔写真資料仮目録

	内容	撮影年月日	形態	撮影地等情報
1	草屋根のお堂	昭和２９	６×６モノクロ	常陸太田市
2	赤子を背負う女性	昭和２９	６×６モノクロ	常陸太田市
3	堆肥小屋の柵に腰掛ける母と子	昭和３０．１	６×６モノクロ	大宮町
4	少女を背負うもんぺ姿の女性	昭和３０．１	６×６モノクロ	大宮町
5	物置の前で遊ぶ子供たち（ふたつの荷車）	昭和３０．１	６×６モノクロ	大宮町
6	草葺きの曲家	昭和３０．１	６×６モノクロ	大宮町
7	田畑風景	昭和３０．１	６×６モノクロ	大宮町
8	晴れ着の少女とその家族	昭和３０．１	６×６モノクロ	大宮町
9	老夫婦	昭和３０．１	６×６モノクロ	大宮町
10	西金砂小祭礼	昭和３０．３．２４	６×６モノクロ	常陸太田市
11	庭に干された洗濯物と、ボール遊びをする女の子	昭和３０．３	６×６モノクロ	常陸太田市
12	草葺きの民家	昭和３０．３	６×６モノクロ	常陸太田市
13	門口に掛けられた杓文字	昭和３０．３	６×６モノクロ	常陸太田市
14	木登りして遊ぶ子供たち	昭和３０．４．２９	６×６モノクロ	常陸太田市
15	赤ちゃんを背負う少女	昭和３０．４．２９	６×６モノクロ	常陸太田市
16	恵比寿	昭和３０．５．３	６×６モノクロ	八郷町
17	神楽面	昭和３０．５．３	６×６モノクロ	八郷町
18	幣之舞（舞台全景）	昭和３０．５．３	６×６モノクロ	八郷町
19	鞠つきをして遊ぶ少女たち（菖蒲の鉢巻を付けている）	昭和３０．６	６×６モノクロ	常陸太田市
20	菖蒲の鉢巻を巻いている赤ちゃん	昭和３０．６	６×６モノクロ	常陸太田市
21	太田市街地の七夕飾り	昭和３０．８．２６	６×６モノクロ	常陸太田市
22	民家とはね釣瓶	昭和３０．９	６×６モノクロ	大宮町
23	少年と、樹上に置かれた鳥籠	昭和３０．９	６×６モノクロ	大宮町
24	ままごとをする女の子	昭和３０．１０	６×６モノクロ	常陸太田市
25	細長く続く潜水橋（沈下橋）	昭和３０．１０	６×６モノクロ	常陸太田市
26	古墳	昭和３０．１２．１８	６×６モノクロ	常陸太田市
27	正宗寺周辺	昭和３０	６×６モノクロ	常陸太田市
28	正宗寺庫裏	昭和３０	６×６モノクロ	常陸太田市
29	西金砂小祭礼	昭和３０	６×６モノクロ	常陸太田市
30	畑に積み上げられた藁	昭和３１．１	６×６モノクロ	常陸太田市（梵天山古墳）
31	ワラホウデン	昭和３１．１	６×６モノクロ	常陸太田市（瑞龍古墳）
32	父と姉弟	昭和３２．１．１３	６×６モノクロ	常陸太田市
33	麻の葉模様の服	昭和３２．１．１３	６×６モノクロ	常陸太田市
34	ヘチマ棚と着物姿の男性	昭和３３．８	６×６モノクロ	大宮町
35	七五三の女の子	昭和３４．６．１３	６×６モノクロ	水戸市
36	フラフープをして遊ぶ少年	昭和３５	６×６モノクロ	水戸市
37	墓地の五輪塔	昭和３７	６×６モノクロ	石岡
38	筑波山名所せきれい石	昭和３８．６～８	６×６モノクロ	筑波町
39	筑波山中	昭和３８．６～８	６×６モノクロ	筑波町
40	板倉（郷校の建物か）	昭和３８．８	６×６モノクロ	大子町
41	潮来の水路と船	昭和３８．７	６×６モノクロ	潮来町
42	草屋根の直屋、盆習俗ほか	昭和３８．８	６×６モノクロ	牛久町
43	牛久沼	昭和３８．８	６×６モノクロ	牛久町
44	大津港	昭和３８．８	６×６モノクロ	北茨城市
45	目籠と竹竿	昭和３９．２	６×６モノクロ	水戸市
46	ニンニク豆腐	昭和３９．２	６×６モノクロ	水戸市
47	えりかけ餅	昭和３９．２	６×６モノクロ	水戸市
48	庭に立てた竹竿と目籠	昭和３９．２	６×６モノクロ	水戸市
49	嫁入りの儀礼	昭和３９．３	６×６モノクロ	大宮町
50	紙漉き	昭和３９．３	６×６モノクロ	山方町
51	楮を水にさらす	昭和３９．３	６×６モノクロ	山方町
52	野良着の女性	昭和３９．３	６×６モノクロ	牛久町
53	鋤簾・馬鍬状の道具	昭和３９．３	６×６モノクロ	牛久町
54	千歯扱き・田下駄	昭和３９．３	６×６モノクロ	牛久町
55	大津の御船祭ほか	昭和３９．５	６×６モノクロ	北茨城市
56	加波山神社茅の輪くぐり（先頭の宮司ブレ）	昭和３９．６．２８	６×６モノクロ	真壁町
57	祭礼食	昭和３９．６．２８	６×６モノクロ	真壁町
58	盆の高灯篭（藁と杉葉の飾り）	昭和３９．８．６～７	６×６モノクロ	霞ヶ浦周辺
59	盆棚	昭和３９．８．６～７	６×６モノクロ	霞ヶ浦周辺
60	延縄の準備をする老人	昭和３９．８．６～７	６×６モノクロ	霞ヶ浦周辺
61	七夕馬	昭和３９．８．６～７	６×６モノクロ	霞ヶ浦周辺
62	民家の神棚	昭和３９．８．６～７	６×６モノクロ	霞ヶ浦周辺
63	道切り	昭和３９．８．６～７	６×６モノクロ	霞ヶ浦周辺
64	高灯篭	昭和３９．８	６×６モノクロ	岩間町
65	盆棚と供物	昭和３９．８	６×６モノクロ	岩間町
66	燈籠念仏の行列	昭和３９．８	６×６モノクロ	岩間町
67	燈籠念仏	昭和３９．８	６×６モノクロ	岩間町
68	棒術	昭和３９．８	６×６モノクロ	水戸市
69	敷物の筵に植物を干す	昭和３９．８．６～７	６×６モノクロ	霞ヶ浦周辺
70	タガラを背負うモンペ姿の婦人	昭和３９．８．６～７	６×６モノクロ	霞ヶ浦周辺
71	如意輪観音石仏群（「南無阿弥陀仏」の札）	昭和３９．８．６～７	６×６モノクロ	霞ヶ浦周辺
72	高灯篭	昭和３９．８．１３～１５	６×６モノクロ	岩間町
73	盆綱	昭和３９．８．１３～１５	６×６モノクロ	岩間町
74	盆綱と子供たち　墓地にて	昭和３９．８．１３～１５	６×６モノクロ	岩間町

	内容	撮影年月日	形態	撮影地等情報
75	盆棚	昭和３９．８．１３～１５	６×６モノクロ	岩間町
76	注連縄の張られた水源地と不動明王石仏	昭和３９．８．１７	６×６モノクロ	水戸市
77	草屋根の曲屋（お盆の民家）	昭和３９．８．１７	６×６モノクロ	水戸市
78	道祖神石祠を竹の棒で打つ子供たち	昭和３９．９．１３	６×６モノクロ	茎崎町
79	石塔を竹の棒で打つ子供たち	昭和３９．９．１３	６×６モノクロ	茎崎町
80	道祖神石祠	昭和３９．９．１３	６×６モノクロ	茎崎町
81	地蔵石仏を竹の棒で打つ子供たち（ガラガラセンド）	昭和３９．９．１３	６×６モノクロ	茎崎町
82	民家で休憩する子供たち（ガラガラセンド）	昭和３９．９．１３	６×６モノクロ	茎崎町
83	石塔に注連縄を張り竹筒を供える	昭和３９．９．１３	６×６モノクロ	茎崎町
84	オカマサマのしめ縄・火難除けの御札・自在鉤	昭和３９．９	６×６モノクロ	県南地域
85	盆綱（お堂と墓地）	昭和３９．９	６×６モノクロ	県南地域
86	船を利用したオダ掛け作業	昭和３９．９	６×６モノクロ	県南地域
87	甲子塔と辻札	昭和３９．９	６×６モノクロ	県南地域
88	吉田神社	昭和３９．１１．２３	６×６モノクロ	水戸市
89	地蔵観音石仏と二股大根	昭和３９．１２．２８、４０．１．４	６×６モノクロ	水戸市
90	張り板に並んだ供え餅	昭和３９．１２．２８、４０．１．４	６×６モノクロ	水戸市
91	ワラホーデン	昭和３９．１２．２８、４０．１．４	６×６モノクロ	水戸市
92	神社境内に積み上げられた縁起物	昭和３９．１２．２８、４０．１．４	６×６モノクロ	水戸市
93	年始の集まり	昭和３９．１２．２８、４０．１．４	６×６モノクロ	水戸市
94	神棚の供物と注連縄	昭和３９．１２．２８、４０．１．４	６×６モノクロ	水戸市
95	巻き簾を使った調理	昭和３９．１２	６×６モノクロ	水戸市
96	竈にある注連縄飾り	昭和３９．１２	６×６モノクロ	水戸市
97	行事食	昭和３９．１２	６×６モノクロ	水戸市
98	頭屋渡しの飾り	昭和３９．１２	６×６モノクロ	水戸市
99	椀を手に酒をいただく人々	昭和３９．１２	６×６モノクロ	水戸市
100	筒粥の占いの結果（筒の中に入った粥の状態）	昭和３９	６×６モノクロ	大宮町
101	三匹獅子舞の頭	昭和４０．１２．２６～２８	６×６モノクロ	鹿島町
102	小屋内に安置されたお枡	昭和４０．３．２８、３０	６×６モノクロ	大子町
103	お枡小屋内部	昭和４０．３．２８、３０	６×６モノクロ	大子町
104	お枡小屋と人物	昭和４０．３．２８、３０	６×６モノクロ	大子町
105	タバコの乾燥場（幹干し）	昭和４０．８．１３	６×６モノクロ	美和村
106	農家の軒先に積み上げられた農具など	昭和４０．８．１３	６×６モノクロ	美和村
107	葉タバコの乾燥作業	昭和４０．８．１３	６×６モノクロ	美和村
108	盆綱	昭和４０．８．１３	６×６モノクロ	小川町
109	田の神石塔	昭和４０．８．３～５	６×６モノクロ	美和村
110	道祖神石塔	昭和４０．８．３～５	６×６モノクロ	美和村
111	天満宮霊座石	昭和４０．８．３～	６×６モノクロ	那珂湊市
112	大きな長屋門を持つ草屋根の民家（直屋）	昭和４０．１．１５	６×６モノクロ	里美村
113	お正月さまの棚と両袖に飾ったハナモチ	昭和４０．１．１５	６×６モノクロ	里美村
114	神棚とハナモチ（高山神社のお札）	昭和４０．１．１５	６×６モノクロ	里美村
115	石？製陽物と小祠	昭和４０．１．１５	６×６モノクロ	里美村
116	高所から見た山間の集落と田畑	昭和４０．１．１５	６×６モノクロ	里美村
117	カシの木とミズ木のマユダマ	昭和４０．１．１５	６×６モノクロ	里美村
118	大根むき花作り	昭和４０．１．１７	３５ミリモノクロ	水戸市
119	大根むき花作り	昭和４０．１．１７	３５ミリモノクロ	水戸市
120	松を飾った神棚	昭和４０．１．１８	６×６モノクロ	大宮町
121	天照皇大神・豊受大神の掛軸と鏡餅	昭和４０．１．１８	６×６モノクロ	大宮町
122	鳥追い	昭和４０．１．１８	６×６モノクロ	里美村
123	僧侶と葬式参列者	昭和４０．２	６×６モノクロ	大宮町
124	葬式	昭和４０．２	６×６モノクロ	大宮町
125	墓地での埋葬	昭和４０．２	６×６モノクロ	大宮町
126	四十九の餅	昭和４０．２	６×６モノクロ	大宮町
127	清めの酒と塩	昭和４０．２	６×６モノクロ	大宮町
128	縁側で休息する人々	昭和４０．２	６×６モノクロ	大宮町
129	道沿いに立つ石塔	昭和４０．３．２４～２５	６×６モノクロ	霞ヶ浦周辺
130	ワラホーデン	昭和４０．３．２４～２５	６×６モノクロ	霞ヶ浦周辺
131	草屋根の葺き替え	昭和４０．３．２４～２５	６×６モノクロ	霞ヶ浦周辺
132	延生の地蔵尊石仏	昭和４０．３．２４～２５	６×６モノクロ	霞ヶ浦周辺
133	石塔	昭和４０．３．２４～２５	６×６モノクロ	霞ヶ浦周辺
134	近津神社の御筒粥神事占い	昭和４０．３．２４～２５	６×６モノクロ	大子町
135	柱に貼られた札（「十二月十二日」）	昭和４０．３．２４～２５	６×６モノクロ	桜川村
136	大師参り講に集う人々	昭和４０．３．２４～２５	６×６モノクロ	桜川村
137	厨子を背負う男性（アンバ信仰）	昭和４０．３．２４～２５	６×６モノクロ	桜川村
138	拝殿内の奉納額	昭和４０．３．２４～２５	６×６モノクロ	桜川村
139	大人形と人物	昭和４０．４．３	６×６モノクロ	石岡市
140	草鞋が下げられた樹木	昭和４０．４．３	６×６モノクロ	石岡市
141	大人形	昭和４０．４．３	６×６モノクロ	石岡市
142	金清さまの石塔と石祠・陽石	昭和４０．４．３	６×６モノクロ	石岡市
143	谷津田での農作業	昭和４０．４．３	６×６モノクロ	石岡市
144	種まきを終えた苗代と鳥除け	昭和４０．４．２５	６×６モノクロ	常陸太田市
145	堂内の道祖神文字塔・陽石	昭和４０．５．６	６×６モノクロ	那珂町
146	釣りをする子供たち	昭和４０．５．６	６×６モノクロ	水戸市
147	鹿島神社鳥居と注連縄	昭和４０．６．１３	６×６モノクロ	谷田部町
148	石塔	昭和４０．６．１３	６×６モノクロ	谷田部町
149	小祠（多数の木彫りの陽物）	昭和４０．６．１３	６×６モノクロ	谷田部町

	内容	撮影年月日	形態	撮影地等情報
150	小祠	昭和４０．６．１３	６×６モノクロ	谷田部町
151	青面金剛石仏	昭和４０．６．１３	６×６モノクロ	谷田部町
152	わら草履・脚半・手拭が多数供えられた石塔と小祠	昭和４０．６．１３	６×６モノクロ	谷田部町
153	鹿島神社	昭和４０．７．３１	６×６モノクロ	鹿嶋市
154	涸沼のあんば祭り	昭和４０．７．３１	６×６モノクロ	茨城町
155	大杉神社拝殿	昭和４０．８．１	６×６モノクロ	茨城町
156	那珂湊八朔祭（棒ささら）	昭和４０．８．１	６×６モノクロ	那珂湊市
157	棒ささら	昭和４０．８．１	６×６モノクロ	那珂湊市
158	民家の台所	昭和４０．８．３	６×６モノクロ	美和村
159	民家の囲炉裏	昭和４０．８．３	６×６モノクロ	美和村
160	石塔（「御鳥居マデ十四町　是より神領」）	昭和４０．８．３	６×６モノクロ	美和村
161	葉タバコの連干し	昭和４０．８．３	６×６モノクロ	美和村
162	葉タバコの連干し	昭和４０．８．３	６×６モノクロ	美和村
163	盆綱	昭和４０．８．１３	６×６モノクロ	小川町・茨城町
164	境内社と小祠	昭和４０．８．１４～１６	６×６モノクロ	大宮町
165	盆棚	昭和４０．８．１４～１６	６×６モノクロ	北浦村
166	盆棚の供物	昭和４０．８．１４～１６	６×６モノクロ	北浦村
167	盆船を莫蓙に包んで運ぶ	昭和４０．８．１４～１６	６×６モノクロ	北浦村
168	盆船を莫蓙に流す	昭和４０．８．１４～１６	６×６モノクロ	北浦村
169	盆船を流す	昭和４０．８．１４～１６	６×６モノクロ	北浦村
170	水上を流れて行く盆船	昭和４０．８．１４～１６	６×６モノクロ	北浦村
171	墓地	昭和４０．８．１６	６×６モノクロ	北浦村
172	埋め墓	昭和４０．８．１６	６×６モノクロ	北浦村
173	盆の飾り物	昭和４０．８．１６	６×６モノクロ	北浦村
174	湖に流れて行く盆船	昭和４０．８．１６	６×６モノクロ	北浦村
175	岸に置かれた盆船	昭和４０．８．１６	６×６モノクロ	北浦村
176	送り出された盆の供物	昭和４０．８．１６	６×６モノクロ	北浦村
177	搗いた餅を丸める	昭和４０．９．２５	６×６モノクロ	水戸市
178	ワラデッポウで地面を打つ少年たち	昭和４０．９．２５	６×６モノクロ	水戸市
179	使用中の蒸籠	昭和４０．９．２５	６×６モノクロ	水戸市
180	餅を箕に入れ頭上に載せて十八夜の月に供える	昭和４０．１０．５	６×６モノクロ	水戸市
181	重箱を持つ少女	昭和４０．１０．５	６×６モノクロ	水戸市
182	亥の子	昭和４０．１０．２３	６×６モノクロ	潮来町
183	水戸三夜尊（桂岸寺）山門	昭和４０．１０．２３	６×６モノクロ	水戸市
184	水路に浮ぶ船	昭和４０．１０．２３	６×６モノクロ	水戸市
185	収穫の終わった田の隅に作られたワラホーデン	昭和４０．１０．２３	６×６モノクロ	水戸市
186	亥の子	昭和４０．１０．２３	６×６モノクロ	水戸市
187	民家屋内に吊り下げられた飾り	昭和４０．１０．２３	６×６モノクロ	潮来町
188	鴨居上に貼られた多数の御札（「鹿嶋大神宮太玉串」）	昭和４０．１０．２３	６×６モノクロ	潮来町
189	御酒盛	昭和４０．１０．２３	６×６モノクロ	鹿島町
190	弥勒踊り	昭和４０．１０．２３	６×６モノクロ	鹿島町
191	有賀様の巡幸	昭和４０．１１．３	６×６モノクロ	水戸市
192	御座替り	昭和４０．１１．２３	６×６モノクロ	筑波町
193	屋根の葺き替え	昭和４０．１１．２３	６×６モノクロ	筑波町
194	曲りのついた草屋根の民家	昭和４０．１２．２６～２８	６×６モノクロ	神栖町
195	神社の格子に括られた多数のワラツト	昭和４０．１２．２６～２８	６×６モノクロ	神栖町
196	明治24年奉納の絵馬（地曳網）	昭和４０．１２．２６～２８	６×６モノクロ	神栖町
197	田の神おろし	昭和４１．１．１５	６×６モノクロ	大宮町
198	サイノカミのケズリカケ	昭和４１．１	６×６モノクロ	大野村
199	祠の参道に立てられた笹の飾り	昭和４１．１	３５ミリハーフカラーポジ	大野村
200	藤田氏の母	昭和４１．１	３５ミリハーフカラーポジ	大宮町
201	谷津田と松林	昭和４１．１	３５ミリハーフカラーポジ	大野村
202	大根むき花作り	昭和４１．２．１７	３５ミリハーフ	水戸市
203	笹神さま・目籠	昭和４１．２	３５ミリハーフカラーポジ	協和町
204	草葺きの建物	昭和４１．２	３５ミリハーフカラーポジ	協和町
205	出世稲荷社と参詣者	昭和４１．２	３５ミリハーフカラーポジ	笠間市
206	笠間稲荷	昭和４１．２	３５ミリハーフカラーポジ	笠間市
207	鹿島神宮の木札を結んだ破魔矢	昭和４１．３．６	３５ミリハーフカラーポジ	神栖町
208	神の池	昭和４１．３．６	３５ミリハーフカラーポジ	神栖町
209	渡船の待合所近くの鳥居	昭和４１．３．７	３５ミリハーフカラーポジ	神栖町
210	鹿島神宮祭頭祭	昭和４１．３．９	３５ミリハーフカラーポジ	鹿島町
211	瓦葺きの民家・目籠立て	昭和４１．３．９	６×６モノクロ	協和町
212	草葺きの民家・目籠立て	昭和４１．３．９	６×６モノクロ	協和町
213	スミツカリの入ったワラツト	昭和４１．３．９	６×６モノクロ	協和町
214	社殿内の神輿	昭和４１．３．９	６×６モノクロ	協和町
215	「昭和４１年度大師尊巡拝表」	昭和４１．３．１１	６×６モノクロ	笠間市
216	寺院で手を合わせる人々	昭和４１．３．１１	６×６モノクロ	笠間市
217	鹿島神宮祭頭祭（囃子）	昭和４１．３．１１	６×６モノクロ	鹿島町
218	鹿島神宮祭頭祭	昭和４１．３．１１	６×６モノクロ	鹿島町
219	念仏を唱える女性たち	昭和４１．３．１５～２６	６×６モノクロ	水戸市
220	オディハンニャ	昭和４１．４	６×６モノクロ	水戸市
221	オディハンニャ	昭和４１．４	６×６モノクロ	水戸市
222	金村別雷神社の市	昭和４１．４（旧３．１５）	３５ミリカラーポジ	豊里町
223	日立風流物	昭和４１．５．３	６×６モノクロ	日立市
224	誕生釈迦仏の厨子と飾り	昭和４１．５	３５ミリハーフカラーポジ	水戸市

	内容	撮影年月日	形態	撮影地等情報
225	草葺きの直屋	昭和４１．５	３５ミリハーフカラーポジ	大宮町
226	卵塔・ウレツキ塔婆・草葺きの直屋	昭和４１．５	３５ミリハーフカラーポジ	大宮町
227	長者屋敷跡	昭和４１．５	３５ミリハーフカラーポジ	水戸市
228	観音の掛軸を前に集う女性たち	昭和４１．５	３５ミリハーフカラーポジ	水戸市
229	オディハンニャ	昭和４１．５	３５ミリハーフカラーポジ	水戸市
230	観音の掛軸を前に集う女性たち	昭和４１．５	３５ミリハーフカラーポジ	水戸市
231	上に石祠のある塚	昭和４１．５	３５ミリハーフカラーポジ	水戸市
232	樹木の根本にあるワラホーデン	昭和４１．５	３５ミリハーフカラーポジ	水戸市
233	日立風流物	昭和４１．５	３５ミリハーフカラーポジ	日立市
234	墓参り	昭和４１．５	３５ミリハーフカラーポジ	大宮町
235	自宅での宴席	昭和４１．５	３５ミリハーフカラーポジ	大宮町
236	鷹巣の風景	昭和４１．５	３５ミリハーフカラーポジ	大宮町
237	薬師堂	昭和４１．５	３５ミリハーフカラーポジ	大宮町
238	日立風流物	昭和４１．６．１４	６×６モノクロ	日立市
239	御札の版木	昭和４１．８	６×６モノクロ	水戸市
240	ワラホーデン	昭和４１．８	６×６モノクロ	水戸市
241	石祠	昭和４１．８	６×６モノクロ	水戸市
242	二十三夜塔・庚申塔・馬力神	昭和４１．８	６×６モノクロ	水戸市
243	草屋根の葺き替え	昭和４１．８	６×６モノクロ	水戸市
244	兜屋根の付いた曲屋	昭和４１．８	６×６モノクロ	水戸市
245	大串貝塚	昭和４１．８	３５ミリハーフカラーポジ	常澄村
246	鹿島神宮御船祭	昭和４１．９．２	６×６モノクロ	鹿島町
247	農具類と牛	昭和４１．９．１０	６×６モノクロ	水戸市
248	牛の飼育	昭和４１．９．１０	６×６モノクロ	水戸市
249	兜屋根の民家	昭和４１．９．１０	６×６モノクロ	水戸市
250	総社宮祭礼	昭和４１．９．２３	３５ミリハーフ	石岡市
251	西蓮寺常行三昧会	昭和４１．９．３０	３５ミリハーフカラーポジ	玉造町
252	帆曳き船	昭和４１．９	３５ミリハーフカラーポジ	麻生町
253	畑の中の石祠	昭和４１．９	３５ミリハーフカラーポジ	水戸市
254	水田の中の神社・オダ掛け作業	昭和４１．９	３５ミリハーフカラーポジ	水戸市
255	小祠	昭和４１．９	３５ミリハーフカラーポジ	麻生町
256	鹿島神宮御船祭	昭和４１．９	３５ミリハーフカラーポジ	鹿島町
257	石祠	昭和４１．１０．３	６×６モノクロ	水戸市周辺
258	水田の中に立つ神社	昭和４１．１０．５	６×６モノクロ	玉造町
259	西蓮寺常行三昧会	昭和４１．１０．５	６×６モノクロ	玉造町
260	草葺きの曲屋	昭和４１．１０	３５ミリハーフカラーポジ	水戸市
261	草葺きの曲屋	昭和４１．１１	６×６モノクロ	水戸市
262	路面電車の線路と水戸市街の道路	昭和４１．１２	３５ミリハーフカラーポジ	水戸市
263	だるま市	昭和４２．１．８	３５ミリハーフカラーポジ	水戸市
264	路面電車の軌道	昭和４２．２．２５	３５ミリハーフ	水戸市
265	初午（稲荷の小祠）	昭和４２．３	３５ミリハーフカラーポジ	水戸市
266	板碑	昭和４２．３．１３～１５	３５ミリハーフカラーポジ	五霞村
267	２階建ての直屋	昭和４２．３．１３～１５	３５ミリハーフカラーポジ	五霞村
268	如意輪観音石仏の十九夜塔と地蔵石仏	昭和４２．３．１３～１５	３５ミリハーフカラーポジ	五霞村
269	草葺きの民家	昭和４２．３．１３～１５	３５ミリハーフカラーポジ	五霞村
270	草葺き2階建ての民家	昭和４２．３．１３～１５	３５ミリハーフカラーポジ	五霞村
271	初午（かさ稲荷）	昭和４２．３．１３～１５	３５ミリハーフカラーポジ	五霞村
272	屋根が段違いになっている草葺きの民家	昭和４２．３．１３～１５	３５ミリハーフカラーポジ	五霞村
273	笠地蔵のお堂	昭和４２．３．１３～１５	３５ミリハーフカラーポジ	五霞村
274	草葺きの直屋	昭和４２．３．１３～１５	３５ミリハーフカラーポジ	五霞村
275	名馬様のお堂と絵馬	昭和４２．３．１３～１５	３５ミリハーフカラーポジ	五霞村
276	草葺きの民家	昭和４２．３．１３～１５	３５ミリハーフカラーポジ	五霞村
277	平坦地の麦畑	昭和４２．３．１９	３５ミリハーフ	桂村/七会村
278	子安観音石仏と馬頭観音のお堂	昭和４２．３．１９	３５ミリハーフ	桂村/七会村
279	聖徳太子文字塔など	昭和４２．３．１９	３５ミリハーフ	桂村/七会村
280	磨崖仏（孫根の観音）	昭和４２．３．１９	３５ミリハーフ	桂村/七会村
281	磨崖仏のある洞窟	昭和４２．３．１９	３５ミリハーフ	桂村/七会村
282	周囲に柵のある石	昭和４２．３．１９	３５ミリハーフ	桂村/七会村
283	草屋根の直屋	昭和４２．３．１９	３５ミリハーフ	桂村/七会村
284	草屋根葺き替え作業中の民家	昭和４２．３．１９	３５ミリハーフ	桂村/七会村
285	笠間焼の登り窯	昭和４２．３．１９	３５ミリハーフ	桂村/七会村
286	稲荷の小祠	昭和４２．３．１９	３５ミリハーフ	桂村/七会村
287	板碑	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
288	２階建ての草葺き民家	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
289	如意輪観音石仏（十九夜塔）と地蔵石仏	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
290	水田と神社	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
291	草屋根にトタンをかぶせた民家	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
292	寺院境内の宝篋印塔など	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
293	草屋根の民家	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
294	十九夜供養の如意輪観音	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
295	神社の建物の前に供えられた藁苞	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
296	石塔と多数の藁苞	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
297	草屋根の直屋	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
298	地蔵尊のお堂	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
299	草屋根の直屋と仔牛	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村

	内容	撮影年月日	形態	撮影地等情報
300	庚申塔群	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
301	集落景観	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
302	六地蔵と観音石仏	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
303	五輪塔群と地蔵石仏	昭和４２．３．２０	３５ミリハーフ	五霞村
304	兜屋根の草葺き	昭和４２．３．２６	６×６モノクロ	常陸太田市
305	田に積まれた堆肥	昭和４２．３．２６	６×６モノクロ	常陸太田市
306	水路と田に積まれた堆肥	昭和４２．３．２６	６×６モノクロ	常陸太田市
307	兜屋根の草葺き民家	昭和４２．３．２７	６×６モノクロ	常陸太田市
308	西金砂小祭礼	昭和４２．３．２７	６×６モノクロ	常陸太田市
309	マダラ鬼神祭	昭和４２．４．１０	３５ミリハーフカラーポジ	大和村
310	神社境内の御神木	昭和４２．８．７	３５ミリハーフ	筑波町
311	草屋根の小さな神社	昭和４２．８．７	３５ミリハーフ	筑波町
312	庭先に干された植物	昭和４２．８．７	３５ミリハーフ	筑波町
313	小祠	昭和４２．８．７	３５ミリハーフ	筑波町
314	草屋根の建物	昭和４２．８．７	３５ミリハーフ	筑波町
315	天満宮霊座石表石碑	昭和４２．９．２６	３５ミリハーフ	那珂湊市
316	天満宮霊座石表石碑	昭和４２．９．２６	３５ミリハーフ	那珂湊市
317	海士	昭和４２．９．２６	３５ミリハーフ	那珂湊市
318	念仏講	昭和４２．９．２６	３５ミリハーフ	水戸市
319	くるり棒を使う女性たち	昭和４２．９．２６	３５ミリハーフ	水戸市
320	機織り道具	昭和４２．９．２６	３５ミリハーフ	水戸市
321	ワラホーデン	昭和４２．１２．１８	３５ミリハーフ	筑波町
322	背負い籠と女性	昭和４２．１２．１８	３５ミリハーフ	筑波町
323	草屋根の直屋	昭和４２．１２．１８	３５ミリハーフ	筑波町
324	十九夜観世音（文政１３年）・二十三夜塔など	昭和４２．１２．１８	３５ミリハーフ	筑波町
325	石祠とワラホーデン	昭和４２．１２．１８	３５ミリハーフ	筑波町
326	土蔵造りの商家	昭和４２．１２．１８	３５ミリハーフ	筑波町
327	道標（「にし　おふそね　いちのや　江戸」）	昭和４２．１２．１８	３５ミリハーフ	筑波町
328	石塔（「つみをつくるべからず　ばくちうつべからず」）	昭和４２．１２．１８	３５ミリハーフ	筑波町
329	虚空蔵尊のお堂	昭和４２．１２．１８	３５ミリハーフ	筑波町
330	石塔	昭和４２．１２．１８	３５ミリハーフ	筑波町
331	タテマエ（上棟式）	昭和４３．２．８	３５ミリハーフモノクロネガ	大宮町
332	兜屋根の草葺き民家	昭和４３．３	３５ミリハーフ	桂村
333	海岸に立つ鳥居	昭和４３．３	３５ミリハーフ	桂村
334	砂浜で海草を干す女性	昭和４３．３	３５ミリハーフ	桂村
335	紙漉き	昭和４３．３	３５ミリハーフ	桂村
336	曲りのついた草屋根の民家	昭和４３．３	３５ミリハーフ	桂村
337	へいさんぼう	昭和４３．５・６	３５ミリハーフモノクロネガ	出島村
338	三匹獅子	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
339	水田の向こうに見える鳥居	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
340	籠を背負う女性の後姿	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
341	籠を背負う婦人	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
342	馬小屋	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
343	山中の石仏と小堂の仏像	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
344	一年忌の法要	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
345	杉皮葺きの建物	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
346	自在鉤	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
347	民家の神棚	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
348	山を背にする農村風景	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
349	道端の鳥居様の木組	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
350	山中の石塔	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
351	山中の鳥居と石塔	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
352	山霊神の石塔（寛政８年）	昭和４３．７・８．３	３５ミリハーフモノクロネガ	北茨城市
353	栗野春慶塗	昭和４３．８．３１	３５ミリハーフ	桂村
354	総社宮祭礼	昭和４３．９．１４～１５	３５ミリモノクロ	石岡市
355	お堂（聖徳太子供養塔）	昭和４３．９．３０	３５ミリハーフ	大宮町
356	草屋根の直屋	昭和４３．９．３０	３５ミリハーフ	大宮町
357	二十六夜尊縁日	昭和４３．１１．８～９	３５ミリハーフ	瓜連町
358	もっこを使う男性2人	昭和４３．１２．１	３５ミリハーフ	大宮町
359	もっこを使う男性3人	昭和４３．１２．１	３５ミリハーフ	大宮町
360	村の景観	昭和４３．１２．１	３５ミリハーフ	大宮町
361	高道祖神社	昭和４３．１２．２５	３５ミリハーフ	下妻市
362	折り取った葦	昭和４３．１２．２５	３５ミリハーフ	下妻市
363	正月の市	昭和４３．１２．２５	３５ミリハーフ	水戸市
364	陽石２体（一体には安政年間の銘）	昭和４４．１・３	３５ミリハーフモノクロ	下妻市
365	道祖神の祠と境内	昭和４４．１・３	３５ミリハーフモノクロ	下妻市
366	葉タバコ栽培	昭和４４	３５ミリモノクロ	水府村
367	民具（加納家）	昭和４５．２．２１	３５ミリハーフモノクロ	水戸市
368	「西宮御神具」箱蓋墨書（文化８年銘ほか）	昭和４５．２．２１	３５ミリハーフモノクロ	水戸市
369	民具（加納家）	昭和４５．２．２１	３５ミリハーフモノクロ	水戸市
370	薬（「烏犀圓」）の引き札	昭和４５．２．２１	３５ミリハーフモノクロ	水戸市
371	曲りのついた草屋根の民家	昭和４５．２．２１	３５ミリハーフモノクロ	水戸市
372	家紋入りの行器（春慶塗）	昭和４５．２．２１	３５ミリハーフモノクロ	水戸市
373	栗野春慶塗	昭和４５．２．２１	３５ミリハーフモノクロ	水戸市
374	農鍛冶関係資料	昭和４５．２．２１	３５ミリハーフモノクロ	水戸市

	内容	撮影年月日	形態	撮影地等情報
375	鍛冶職人	昭和４５．２．２１	３５ミリハーフモノクロ	水戸市
376	押し絵職人	昭和４５．２．２１	３５ミリハーフモノクロ	水戸市
377	茶畑	昭和４５．３．１４～１５	３５ミリハーフモノクロ	猿島町
378	田の中に立てられた大助人形	昭和４５．３．１４～１５	３５ミリハーフモノクロ	茨城町
379	周囲屋根の上まで割り石が奉納されている小祠	昭和４５．６．２５	３５ミリハーフモノクロ	古河市
380	仕事着姿の女性たち	昭和４５．６．２５	３５ミリハーフモノクロ	古河市
381	泉の中に立つ鳥居	昭和４５．７．２３～２５	３５ミリハーフモノクロ	玉造町
382	大般若経の祈祷木札	昭和４５．７．２３～２５	３５ミリハーフモノクロ	玉造町
383	大般若経祈祷の紙札等	昭和４５．７．２３～２５	３５ミリハーフモノクロ	玉造町
384	池の中に立つ鳥居	昭和４５．７．２９～３１	３５ミリハーフカラー	玉造町
385	石仏	昭和４５．７．２９～３１	３５ミリハーフカラー	玉造町
386	盆の高燈篭	昭和４５．８．２０	３５ミリハーフモノクロ	大宮町
387	木碑が並ぶ墓地	昭和４５．８．２０	３５ミリハーフモノクロ	大宮町
388	新盆の盆棚	昭和４５．８．２０	３５ミリハーフモノクロ	大宮町
389	曲りのついた草屋根の民家	昭和４５．８．２０	３５ミリハーフモノクロ	大宮町
390	葉タバコ栽培	昭和４５．８．２０	３５ミリハーフモノクロ	大宮町
391	盆棚	昭和４５．８．２０	３５ミリハーフモノクロ	大宮町
392	鉄鍋	昭和４５．９．１２	３５ミリハーフモノクロ	河内村
393	横槌	昭和４５．９．１２	３５ミリハーフモノクロ	河内村
394	鎌を使っての稲刈り	昭和４５．９．１２	３５ミリハーフモノクロ	河内村
395	バインダーでの稲刈り	昭和４５．９．１２	３５ミリハーフモノクロ	河内村
396	民家の草屋根に投げ上げられた藁の束	昭和４５．９．１２	３５ミリハーフモノクロ	河内村
397	水辺の草地に放牧された牛	昭和４５．９．１２	３５ミリハーフモノクロ	河内村
398	生垣を廻らせた草屋根の民家	昭和４５．９．１２	３５ミリハーフモノクロ	河内村
399	オダ掛け	昭和４５．９．１２	３５ミリハーフモノクロ	河内村
400	コンバインを使う人とその見物人	昭和４５．９．１２	３５ミリハーフモノクロ	河内村
401	稲刈りをする女性たち	昭和４５．９．１２	３５ミリハーフモノクロ	河内村
402	民家の土蔵	昭和４５．９．１２	３５ミリハーフモノクロ	河内村
403	オダ掛け	昭和４５．９．１２	３５ミリハーフモノクロ	河内村
404	オダ掛け	昭和４５．１１．２２	３５ミリハーフモノクロ	筑波山麓地域
405	結城紬	昭和４５．１１．２２	３５ミリハーフモノクロ	結城市
406	神社拝殿での直会	昭和４５．１２．１０	３５ミリモノクロ	水戸市
407	吉田神社祭礼	昭和４５．１２．１０	３５ミリモノクロ	水戸市
408	目篭	昭和４５．１２．１０	３５ミリモノクロ	水戸市
409	海岸	昭和４５．１２．１０	３５ミリモノクロ	日立市
410	鵜捕り	昭和４５．１２．３１	３５ミリモノクロ	十王町
411	石塔	昭和４５	３５ミリハーフカラー	茨城町
412	注連飾りの出店	昭和４６．１．１０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
413	岩瀬万能膏とパッケージ	昭和４６．１．１０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
414	足半草履	昭和４６．１．１０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
415	松飾り	昭和４６．１．１０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
416	曲りのついた草屋根の民家	昭和４６．１．１０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
417	松飾り	昭和４６．１．１０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
418	民家の台所	昭和４６．１．１０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
419	松飾り	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
420	正月の神棚	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
421	囲炉裏	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
422	松飾り	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
423	囲炉裏	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
424	縁側に座る3人の少女	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
425	中島藤衛門貞詮紀功碑（コンニャクが描かれた掛軸）	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
426	柄杓を使って水を飲む子供	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
427	金剛界大日如来	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
428	山麓の斜面に開けた集落	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
429	草屋根の直屋	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
430	アワボヒエボ	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
431	ザクマタ・雷神様の御札	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
432	室内の鴨居に立てた幣束	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
433	安産子育祈祷札（山田宝珠庵）	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
434	数珠繰り	昭和４６．１．２０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
435	正月の市	昭和４６．２．１０	３５ミリモノクロ	協和町
436	正月の市	昭和４６．２．１０	３５ミリモノクロ	協和町
437	正月の市	昭和４６．２．１０	３５ミリモノクロ	協和町
438	道祖神石仏（安永３年）	昭和４６．２．１０	３５ミリモノクロ	協和町
439	墨書のある杓文字	昭和４６．２．１０	３５ミリモノクロ	協和町
440	民家入口に飾られたイワシの頭	昭和４６．２．１０	３５ミリモノクロ	協和町
441	藁苞が供えられた小社	昭和４６．２．１０	３５ミリモノクロ	協和町
442	藁苞とイワシの頭	昭和４６．２．１０	３５ミリモノクロ	協和町
443	庭に立てられた目篭	昭和４６．２．１０	３５ミリモノクロ	協和町
444	笹神さま	昭和４６．２．１０	３５ミリモノクロ	協和町
445	成田山の御札	昭和４６．２．１０	３５ミリモノクロ	協和町
446	紙垂のついた注連縄	昭和４６．２．１０	３５ミリモノクロ	協和町
447	室内の柱につけられた幣束	昭和４６．２．１０	３５ミリモノクロ	協和町
448	ワラホーデン	昭和４６．２．１０	３５ミリモノクロ	協和町
449	結城紬を織る女性	昭和４６．２．１１、２１	３５ミリモノクロ	県西地域（『日本の民俗 茨城』関連写真）

	内容	撮影年月日	形態	撮影地等情報
450	小社に奉納された毛髪	昭和４６．２．１１、２１	３５ミリモノクロ	県西地域（『日本の民俗 茨城』関連写真）
451	不明寺院本堂	昭和４６．２．１１、２１	３５ミリモノクロ	県西地域（『日本の民俗 茨城』関連写真）
452	結城紬を織る女性	昭和４６．２．１１、２１	３５ミリモノクロ	県西地域（『日本の民俗 茨城』関連写真）
453	寺院の柱に貼られた「め」の字の紙札	昭和４６．２．１１、２１	３５ミリモノクロ	県西地域（『日本の民俗 茨城』関連写真）
454	廻国塔	昭和４６．２．１１、２１	３５ミリモノクロ	県西地域（『日本の民俗 茨城』関連写真）
455	六地蔵石仏	昭和４６．２．１１、２１	３５ミリモノクロ	県西地域（『日本の民俗 茨城』関連写真）
456	筑波山神社の辻札	昭和４６．２．１１、２１	３５ミリモノクロ	県西地域（『日本の民俗 茨城』関連写真）
457	藁苞を多数掛けられた地蔵石仏	昭和４６．２．１１、２１	３５ミリモノクロ	県西地域（『日本の民俗 茨城』関連写真）
458	石塔と庚申塔	昭和４６．２．１１、２１	３５ミリモノクロ	県西地域（『日本の民俗 茨城』関連写真）
459	ザカマタ	昭和４６．２．１１、２１	３５ミリモノクロ	県西地域（『日本の民俗 茨城』関連写真）
460	十九夜文字塔（元禄１５年）	昭和４６．２．１１、２１	３５ミリモノクロ	県西地域（『日本の民俗 茨城』関連写真）
461	掛軸に手を合わせる幼児と女性	昭和４６．２．１１、２１	３５ミリモノクロ	県西地域（『日本の民俗 茨城』関連写真）
462	石塔	昭和４６．２．２１	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
463	追善供養の札	昭和４６．２．２１	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
464	枕飯	昭和４６．２．２１	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
465	新仏の墓	昭和４６．２．２１	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
466	墓に吊るされた草鞋	昭和４６．２．２１	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
467	墓地に立てられた六地蔵の燈明台	昭和４６．２．２１	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
468	阿弥陀三尊種子と仏像２体を刻んだ石塔	昭和４６．２．２１	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
469	草屋根式台つきの直屋型民家	昭和４６．２．２１	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
470	息つき竹と草鞋	昭和４６．２．２１	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
471	十三仏と札類	昭和４６．２．２１	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
472	三面六臂の馬頭観音石仏	昭和４６．２．２１	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
473	聖観音・千手観音・不空羂索観音石仏	昭和４６．２．２１	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
474	不動明王と二童子像石仏	昭和４６．２．２１	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
475	葬式	昭和４６．２．２８	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
476	ワラホーデン	昭和４６．２．２８	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
477	民具　唐箕	昭和４６．２．２８	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
478	手接神社への奉納物	昭和４６．２．２８	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
479	多数の奉納絵馬	昭和４６．２．２８	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
480	手接神社境内と社殿	昭和４６．２．２８	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
481	人名が書き連ねられた木の札	昭和４６．２．２８	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
482	墓地に立てられた六地蔵燈明台	昭和４６．２．２８	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
483	不明寺院境内（石造の仁王像一対）	昭和４６．２．２８	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
484	石造仁王像（阿形）	昭和４６．２．２８	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
485	石造仁王像（吽形）	昭和４６．２．２８	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
486	念仏講	昭和４６．２	３５ミリモノクロ	守谷町
487	道祖神石塔・二股大根	昭和４６．２	３５ミリモノクロ	守谷町
488	お堂の壁に貼られた百堂供養の御札	昭和４６．２	３５ミリモノクロ	守谷町
489	力石か（二十九貫目の文字あり）	昭和４６．２	３５ミリモノクロ	守谷町
490	ヌルデ製の粥箸（ケーバシ）・アワボヒエボ	昭和４６．２	３５ミリモノクロ	守谷町
491	ザクマタ・雷神様の御札	昭和４６．２	３５ミリモノクロ	守谷町
492	アワボヒエボ	昭和４６．２	３５ミリモノクロ	守谷町
493	餅を使ったつくりもの	昭和４６．２	３５ミリモノクロ	守谷町
494	托鉢僧	昭和４６．２	３５ミリモノクロ	守谷町
495	家の門に立つ托鉢僧	昭和４６．２	３５ミリモノクロ	守谷町
496	六地蔵寺安産決定秘符并御守	昭和４６．４．３０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
497	梵字（阿弥陀の種子）の板碑（康永２年）	昭和４６．４．３０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
498	籠を背負う女性	昭和４６．４．３０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
499	藁苞	昭和４６．４．３０	３５ミリモノクロ	『日本の民俗 茨城』関連写真
500	七夕まつり	昭和４６．８．１０	３５ミリモノクロ	土浦市
501	藁をもじる老人	昭和４６．８．３０	３５ミリモノクロ	茎崎村
502	六字様	昭和４６．８．１８	６×６カラーポジ	緒川村
503	六字様	昭和４６．８．１８	６×６カラーポジ	緒川村
504	たらい船	昭和４７．１．９	３５ミリモノクロ	大洗町
505	磐座か	昭和４７．４．７	３５ミリモノクロ	常陸太田市（磯部神社）
506	鳥居	昭和４７．８．１	３５ミリモノクロ	大洗町
507	大洗磯前神社八朔祭	昭和４７	３５ミリモノクロ	大洗町
508	家印と屋号記した表（大洗漁協売買契約者）	昭和４７	３５ミリモノクロ	大洗町
509	オシンメサマ	昭和４７	３５ミリモノクロ	勝田市
510	奉納絵馬	昭和４７	３５ミリモノクロ	大和村
511	茅の輪くぐり	昭和４８．６	６×６カラー	水戸市
512	愛宕神社奉納絵馬	昭和４８．７．９	３５ミリモノクロ	玉造町
513	大里来迎院本堂	昭和４８．７．９	３５ミリモノクロ	常陸太田市
514	木出し	昭和４８．８．５	３５ミリモノクロ	大子町
515	木出し	昭和４８．８．５	３５ミリモノクロ	大子町
516	ささらの獅子頭	昭和４８．８．５	３５ミリモノクロ	大子町
517	木出し作業（割り竹を敷いた山道）	昭和４８．８．５	３５ミリモノクロ	大子町
518	囲炉裏に置かれたダルマストーブ	昭和４８．８．５	３５ミリモノクロ	大子町
519	木出し	昭和４８．８．５	３５ミリモノクロ	大子町
520	藁草履	昭和４８．８．１５	３５ミリモノクロ	八郷町
521	藁を束ね縄をつけた道具	昭和４８．８．１５	３５ミリモノクロ	八郷町
522	野良着の女性	昭和４８．８．１５	３５ミリモノクロ	八郷町
523	真家のみたまおどり	昭和４８．８．１５	３５ミリモノクロ	八郷町
524	囲炉裏	昭和４８．８．３１	３５ミリモノクロ	大子町

	内容	撮影年月日	形態	撮影地等情報
525	屋根に千木を設けた直屋型の建物	昭和４８．８．３１	３５ミリモノクロ	大子町
526	掛軸（文久3年の銘あり）	昭和４８．８．３１	３５ミリモノクロ	大子町
527	講の記録（藤エ門講・秋葉様・風祭り・山の神）	昭和４８．８．３１	３５ミリモノクロ	大子町
528	新盆の家の盆棚	昭和４８．８	６×６カラーポジ	八郷町
529	別雷神社祭礼（向井町の棒ささら）	昭和４８．１０	６×６ネガカラー	水戸市
530	大串の稲荷神社祭礼（大串ささら）	昭和４８．１１	３５ミリモノクロ	常澄村
531	大串の稲荷神社祭礼（下大野みろく）	昭和４８．１１	３５ミリモノクロ	常澄村
532	大串の稲荷神社祭礼	昭和４８．１１	３５ミリモノクロ	常澄村
533	小祠	昭和４８．１１	３５ミリモノクロ	常澄村
534	大串の稲荷神社祭礼	昭和４８．１１	３５ミリモノクロ	常澄村
535	塚崎のささら（獅子舞）	昭和４８．１１．１５	６×６カラーポジ	境町
536	大飯祭り	昭和４８．１２．１３	６×６ポジカラー	岩瀬町
537	文書（庚申講の記録）	昭和４８	３５ミリモノクロ	大宮町
538	元始参の御札（小野鹿島高房神社）	昭和４９．１．１２	３５ミリモノクロ	大宮町
539	親睦会諸入用帳（明治30年）	昭和４９．１．１２	３５ミリモノクロ	大宮町
540	オカマサマ	昭和４９．１．１５	３５ミリモノクロ	水戸市
541	オカマサマ	昭和４９．１．１５	３５ミリモノクロ	水戸市
542	オカマサマ	昭和４９．１．１５	３５ミリモノクロ	水戸市
543	繭玉	昭和４９．１．１５	３５ミリモノクロ	水戸市
544	草屋根の直屋	昭和４９．１．１５	３５ミリモノクロ	水戸市
545	石祠	昭和４９．１．１５	３５ミリモノクロ	水戸市
546	七夕馬	昭和４９．１．１５	３５ミリモノクロ	水戸市
547	俵の円座	昭和４９．１．１５	３５ミリモノクロ	水戸市
548	御神体の石と供物の藁苞	昭和４９．７．２８	３５ミリモノクロ	岩瀬町
549	不動様の御堂	昭和４９．７．２８	３５ミリモノクロ	岩瀬町
550	水田の中にある畑	昭和４９．７．２８	３５ミリモノクロ	岩瀬町
551	墓地に立てられた草履や草鞋	昭和４９．７．２８	３５ミリモノクロ	岩瀬町
552	掛軸と入れ物の竹筒	昭和４９．７．２８	３５ミリモノクロ	岩瀬町
553	幣束	昭和４９．７．２８	３５ミリモノクロ	岩瀬町
554	神棚と加波山の御札	昭和４９．７．２８	３５ミリモノクロ	岩瀬町
555	稲荷神社祭礼（大串のささら）	昭和４９	６×６ポジカラー	常澄村
556	稲荷神社祭礼（大野のみろく）	昭和４９	６×６ポジカラー	常澄村
557	涸沼	昭和５０．１．１４	３５ミリモノクロ	茨城町
558	しじみを掻く道具	昭和５０．１．１４	３５ミリモノクロ	茨城町
559	繭玉	昭和５０．１．１５	３５ミリハーフカラー	大宮町
560	背守り	昭和５０．２	３５ミリハーフカラー	千代田村
561	えりかけ餅	昭和５０．２．２２	３５ミリモノクロ	常陸太田市
562	大洗海岸	昭和５０．３	６×６カラーポジ	大洗町
563	捕った貝を入れる網	昭和５０．３．３０	３５ミリモノクロ	大洗町
564	貝を捕る道具	昭和５０．３．３０	３５ミリモノクロ	大洗町
565	藁草履	昭和５０．３．３０	３５ミリモノクロ	大洗町
566	水木当屋祭	昭和５０．３．３０	３５ミリモノクロ	日立市
567	熊野神社祭礼	昭和５０．４．５	３５ミリモノクロ	大子町
568	草屋根の直屋	昭和５０．４．５	３５ミリモノクロ	大子町
569	熊野神社祭礼	昭和５０．５	３５ミリカラーポジ	大子町
570	浅川のささら（獅子頭）	昭和５０．５	３５ミリカラーポジ	大子町
571	熊野神社遷宮祭	昭和５０．５	３５ミリカラーポジ	大子町
572	水田をマンノウで起こす	昭和５０．５	３５ミリカラーポジ	協和町
573	田起こし	昭和５０．５	３５ミリカラーポジ	協和町
574	馬耕	昭和５０．５	３５ミリカラーポジ	協和町
575	親鸞上人説法石	昭和５０．７	３５ミリモノクロ	石岡市
576	葉タバコの乾燥	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
577	谷津田と民家	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
578	愛宕神社祭礼の御仮屋	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
579	畑と民家	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
580	棚田と民家	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
581	傾斜地の農村	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
582	小祠	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
583	小祠に続く石段	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
584	草屋根の曲り屋・タバコ畑	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
585	背負い梯子	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
586	小祠	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
587	草屋根の曲屋と水田	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
588	棚田と山	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
589	水田と山と民家	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
590	愛宕神社の辻札	昭和５０．８．１～３	３５ミリモノクロ	常陸太田市
591	谷津の棚田	昭和５０．８．２４	３５ミリモノクロ	里美村
592	山の神の鳥居	昭和５０．８．２４	３５ミリモノクロ	里美村
593	山の神石塔・山の神像	昭和５０．８．２４	３５ミリモノクロ	里美村
594	背負い梯子を使う女性	昭和５０．８．２４	３５ミリモノクロ	里美村
595	水田と小川・田のクロでの大豆栽培	昭和５０．８．２４	３５ミリモノクロ	里美村
596	鷲子山上神社祭礼	昭和５０．８．７	３５ミリハーフカラー	美和村
597	鍬の祭り（大国玉神社）	昭和５１．１．３	３５ミリモノクロ	大和村
598	繭玉	昭和５１．１．１４	３５ミリモノクロ	日立市
599	楮の表皮をとる	昭和５１．１．１５	３５ミリモノクロ	大子町

	内容	撮影年月日	形態	撮影地等情報
600	鍬入れで用いた松の枝	昭和５１．１．１５	３５ミリモノクロ	大子町
601	傾斜地の楮畑	昭和５１．１．１５	３５ミリモノクロ	大子町
602	束ねられた楮	昭和５１．１．１５	３５ミリモノクロ	大子町
603	コンニャク玉	昭和５１．１．１５	３５ミリモノクロ	大子町
604	トタン屋根の土蔵	昭和５１．１．１５	３５ミリモノクロ	大子町
605	垣	昭和５１．１．１５	３５ミリモノクロ	大子町
606	楮の乾燥	昭和５１．１．１５	３５ミリモノクロ	大子町
607	水田に積まれた堆肥	昭和５１．１．１５	３５ミリモノクロ	大子町
608	椿の枝を飾りつける女性	昭和５１．１	３５ミリカラーポジ	日立市
609	繭玉	昭和５１．１	３５ミリカラーポジ	日立市
610	石仏のお堂前に集まった女性たちと子ども	昭和５１．２．８	３５ミリカラーポジ	大宮町
611	お堂・梢付き塔婆	昭和５１．２．８	３５ミリカラーポジ	大宮町
612	ご馳走を食べる女性たち	昭和５１．２．８	３５ミリカラーポジ	大宮町
613	地蔵の掛軸	昭和５１．２．２０	３５ミリモノクロ	大宮町
614	石仏前での供養	昭和５１．２．２０	３５ミリモノクロ	大宮町
615	石仏前での投餅	昭和５１．２．２０	３５ミリモノクロ	大宮町
616	兜屋根の曲がりのついた草屋根の民家	昭和５１．２．２０	３５ミリモノクロ	大宮町
617	講の会食	昭和５１．２．２０	３５ミリモノクロ	大宮町
618	庭に立てられた目籠	昭和５１．２．２０	３５ミリモノクロ	大宮町
619	調理をする女性	昭和５１．３	３５ミリカラーポジ	東海村
620	子安講	昭和５１．５	３５ミリカラーポジ	常陸太田市
621	クルリ棒	昭和５１．６．５	３５ミリモノクロ	大宮町
622	松の木	昭和５１．６．５	３５ミリモノクロ	大宮町
623	野良着の女性	昭和５１．６．５	３５ミリモノクロ	大宮町
624	神棚と幣束や御札が入った俵	昭和５１．６．５	３５ミリモノクロ	大宮町
625	間仕切りの戸と神棚	昭和５１．６．５	３５ミリモノクロ	大宮町
626	納戸に収納された蒲団	昭和５１．６．５	３５ミリモノクロ	大宮町
627	安産のお守り	昭和５１．６．５	３５ミリモノクロ	大宮町
628	氏神様	昭和５１．６．５	３５ミリモノクロ	大宮町
629	箱ふるい（宝暦14年）	昭和５１．６．５	３５ミリモノクロ	大宮町
630	唐箕を使った作業	昭和５１．６．１３	３５ミリモノクロ	大宮町
631	麦の刈り取り	昭和５１．６．１３	３５ミリモノクロ	大宮町
632	草屋根の直屋	昭和５１．６．１３	３５ミリモノクロ	大宮町
633	麦の刈り取り	昭和５１．６．１３	３５ミリモノクロ	大宮町
634	近津神社中田植	昭和５１．６	３５ミリモノクロ	大子町
635	井関の大人形	昭和５１．８．２９	３５ミリモノクロ	石岡市
636	近津神社中田植	昭和５１．８	３５ミリカラーポジ	大子町
637	コンニャク畑	昭和５１．８	３５ミリカラーポジ	常陸太田市
638	傾斜地の集落	昭和５１．８	３５ミリカラーポジ	常陸太田市
639	トウキビ畑	昭和５１．８	３５ミリカラーポジ	常陸太田市
640	野良着の男性	昭和５１．８	３５ミリカラーポジ	常陸太田市
641	飯櫃	昭和５１．９．３	３５ミリモノクロ	水戸市
642	網針	昭和５１．９．３	３５ミリモノクロ	水戸市
643	漁具	昭和５１．９．３	３５ミリモノクロ	水戸市
644	鋤	昭和５１．９．３	３５ミリモノクロ	水戸市
645	木摺臼	昭和５１．９．３	３５ミリモノクロ	水戸市
646	浮子（木製）	昭和５１．９．３	３５ミリモノクロ	水戸市
647	地引網の絵馬（明治24年）	昭和５１．９．３	３５ミリモノクロ	水戸市
648	地機	昭和５１．９．３	３５ミリモノクロ	水戸市
649	苗籠	昭和５１．１１．１０	３５ミリモノクロ	水戸市
650	炭焼き小屋	昭和５１．１１．１０	３５ミリモノクロ	水戸市
651	唐箕	昭和５１．１１．１０	３５ミリモノクロ	水戸市
652	孫渡し	昭和５１．１２	３５ミリカラーポジ	神栖町
653	楮の表皮の乾燥	昭和５１	３５ミリカラーポジ	大子町
654	楮の表皮とり	昭和５１	３５ミリカラーポジ	大子町
655	楮の表皮とり	昭和５１	３５ミリカラーポジ	大子町
656	傾斜地にある楮畑	昭和５１	３５ミリカラーポジ	大子町
657	水田と山々（峰寺から常総平野の眺め）	昭和５１	３５ミリカラーポジ	石岡市
658	唐箕を使った稲の選別	昭和５１	３５ミリカラーポジ	大宮町
659	麦の刈り取り	昭和５１	３５ミリカラーポジ	大宮町
660	茅葺き直屋型民家	昭和５１	３５ミリカラーポジ	大宮町
661	野良着の女性	昭和５１	３５ミリカラーポジ	大宮町
662	野良着の女性	昭和５１	３５ミリカラーポジ	大宮町
663	長屋門	昭和５１	３５ミリカラーポジ	大宮町
664	水田の中の松	昭和５１	３５ミリカラーポジ	大宮町
665	水田と里山の集落	昭和５１	３５ミリカラーポジ	大宮町
666	機織り石	昭和５１	３５ミリカラーポジ	大宮町
667	凍みこんにゃくづくり	昭和５２．１．２１	３５ミリモノクロ	水府村
668	新田神楽	昭和５２．１．２３	３５ミリモノクロ	鹿島町
669	小社の前に獅子頭を祀る	昭和５２．１．２３	３５ミリモノクロ	鹿島町
670	新田神楽	昭和５２．１．２３	３５ミリモノクロ	鹿島町
671	東金砂神社嵐除祭	昭和５２．２．１１	３５ミリカラーポジ	水府村
672	地蔵観音石仏	昭和５２．９	３５ミリモノクロ	常陸太田市
673	傾斜地の集落	昭和５２．９	３５ミリモノクロ	常陸太田市
674	後生車を回す子供	昭和５２．９	３５ミリモノクロ	常陸太田市

	内容	撮影年月日	形態	撮影地等情報
675	籾の天日干し	昭和５２．１０．２８	３５ミリカラー	水府村
676	鹿島神宮参道	昭和５３．７．２８	３５ミリモノクロ	鹿島町
677	地蔵・観音石仏、馬頭観音文字塔等と奉納物	昭和５３．７．２９	３５ミリモノクロ	東海村
678	箱に花を手向ける女性	昭和５３．１２	３５ミリモノクロ	岩瀬町
679	笠間四十八灯篭	昭和５４．８．２０	３５ミリモノクロ	笠間市
680	集落の景観	昭和５５．５	３５ミリモノクロ	水府村
681	畑仕事の女性	昭和５５．５	３５ミリモノクロ	水府村
682	傾斜地の畑で作業する女性	昭和５５．５	３５ミリモノクロ	水府村
683	籠を背負う女性	昭和５５．５	３５ミリモノクロ	水府村
684	地蔵石仏	昭和５５．５	３５ミリモノクロ	常陸太田市
685	土饅頭の並ぶ埋め墓	昭和５５．７．２０	３５ミリモノクロ	水府村
686	草屋根の民家	昭和５５．７．２０	３５ミリモノクロ	水府村
687	傾斜地の集落	昭和５５．７．２０	３５ミリモノクロ	水府村
688	傾斜地の畑と人家	昭和５５．７．２０	３５ミリモノクロ	水府村
689	谷津の棚田	昭和５５．７．２０	３５ミリモノクロ	水府村
690	子安観音石仏	昭和５５．８．３１	３５ミリモノクロ	那珂町
691	馬の鞍	昭和５６．１０．２１	３５ミリモノクロ	東海村
692	成田山の木札	昭和５５．１１．２０	３５ミリモノクロ	常陸太田市
693	地蔵石仏群	昭和５８	３５ミリカラーポジ	勝田市
694	石塔や石灯篭、奉納の手拭（小旗）	昭和５８	３５ミリカラーポジ	勝田市
695	多数の小旗が奉納されたお堂・小石が積まれた燈籠	昭和５８	３５ミリカラーポジ	勝田市
696	盆船	昭和５９．８	３５ミリカラーポジ	北茨城市
697	藁苞に入った神饌	昭和５９．１２	３５ミリカラー	大洗町
698	葬式	昭和５９	３５ミリカラーポジ	大宮町
699	八幡神社の湯立て神事	昭和６０．１．４	３５ミリモノクロ	水戸市
700	六地蔵燭台	昭和６０．１	３５ミリモノクロ	水戸市
701	傾斜地に立つ民家	昭和６０．２．２４	３５ミリカラー	緒川村
702	西金砂神社小祭礼	昭和６０．３	３５ミリカラー	金砂郷村
703	百体観音（磨崖仏）	昭和６０．４．２９	３５ミリカラー	千代田村
704	大杉さま	昭和６０．５．１	３５ミリカラー	鉾田町
705	八溝のボンデン	昭和６０．５．１	３５ミリカラー	大子町
706	大杉さま　天狗様と焚き火	昭和６０．５．１	３５ミリカラーポジ	鉾田町
707	八溝のボンテン	昭和６０．５．１～５	３５ミリモノクロ	大子町
708	花園神社祭礼（ささら）	昭和６０．５．３	３５ミリカラー	北茨城市
709	花園神社に奉納されたアワビの絵と絵馬	昭和６０．５．３	３５ミリモノクロ	北茨城市
710	花園神社祭礼	昭和６０．５．３	３５ミリモノクロ	北茨城市
711	多数の陽石	昭和６０．５	３５ミリカラー	北茨城市
712	百体観音（磨崖仏）	昭和６０．５	３５ミリモノクロ	千代田村
713	大杉さま	昭和６０．５	３５ミリモノクロ	鉾田町
714	会瀬のささら	昭和６０．５	３５ミリカラー	日立市
715	日立風流物	昭和６０．５	３５ミリカラー	日立市
716	じゃんがら念仏	昭和６０．８	３５ミリカラーポジ	北茨城市
717	盆船	昭和６０．８	３５ミリカラーポジ	北茨城市
718	神峰祭	昭和６０．５．４	３５ミリカラーポジ	日立市
719	西金砂神社十二合祭	昭和６０．１２	３５ミリモノクロ	金砂郷村
720	地蔵石仏	昭和６０か	３５ミリカラーポジ	大宮町
721	白山神社オビシャ	昭和６１．１～４	３５ミリモノクロ	取手市
722	豊受皇大神宮筒粥神事	昭和６１．１．１５	３５ミリモノクロ	東海村
723	オビシャ	昭和６１．１．１５	３５ミリモノクロ	龍ヶ崎市
724	白山神社オビシャ	昭和６１．１．１５	３５ミリモノクロ	取手市
725	石塔・塔婆	昭和６１．３	３５ミリモノクロ	協和町
726	阿弥陀如来石仏	昭和６１．３	３５ミリモノクロ	協和町
727	金村別雷神社春例大祭	昭和６１．旧３．１５	３５ミリカラーポジ	豊里町
728	筑波山神社御座替り神事	昭和６１．４．１	３５ミリカラーポジ	筑波町
729	十三塚	昭和６１．４．１	３５ミリカラーポジ	八郷町
730	十三塚	昭和６１．４．１	３５ミリカラーポジ	八郷町
731	筑波山神社御座替り神事	昭和６１．４．１	３５ミリカラーポジ	筑波町
732	天道念仏	昭和６１．４．６	３５ミリカラーポジ	常陸太田市
733	鮑杯神事	昭和６１．４．７	３５ミリモノクロ	水戸市
734	佐志能神社十二座神楽	昭和６１．４．９	３５ミリカラーポジ	石岡市
735	動物避けの割竹（墓地）	昭和６１．４	３５ミリモノクロ	石岡市
736	農具販売の市	昭和６１．４	３５ミリモノクロ	石岡市
737	天道念仏	昭和６１．４	３５ミリモノクロ	常陸太田市
738	庚申塔と地蔵石仏	昭和６１．４	３５ミリモノクロ	常陸太田市
739	日月待供養塔	昭和６１．４	３５ミリモノクロ	常陸太田市
740	天道念仏	昭和６１．４	３５ミリモノクロ	常陸太田市
741	鮑杯神事	昭和６１．４	３５ミリカラーポジ	水戸市
742	観音掛軸（水戸笠原山神崎寺）	昭和６１．４	３５ミリカラーポジ	東海村
743	六地蔵掛軸	昭和６１．４	３５ミリカラーポジ	東海村
744	新仏の墓地の龍頭や飾り物	昭和６１．５．５	３５ミリモノクロ	玉造町
745	大宮神社浜降り祭	昭和６１．５．５	３５ミリカラー	玉造町
746	西金砂神社本殿	昭和６１．５	３５ミリカラー	金砂郷村
747	普明神社釜鳴神事	昭和６１．５	３５ミリカラーポジ	真壁町
748	講中先達の委嘱状（昭和47年）	昭和６１．５	３５ミリカラーポジ	東海村
749	村松山からの講中世話人嘱託状（昭和9年）	昭和６１．５	３５ミリカラーポジ	東海村

	内容	撮影年月日	形態	撮影地等情報
750	二十三夜供養塔	昭和６１．６．２０	３５ミリカラーポジ	協和町
751	金剛界大日石仏	昭和６１．６．２６	３５ミリカラーポジ	関城町
752	石塔	昭和６１．６．２６	３５ミリカラーポジ	関城町
753	奉納された剣形（駒ケ滝不動尊）	昭和６１．６．２６	３５ミリカラーポジ	関城町
754	時念仏供養の石仏（元禄15年）	昭和６１．６．２６	３５ミリカラーポジ	関城町
755	加波山神社茅の輪くぐり	昭和６１．６．２８	３５ミリカラーポジ	真壁町
756	静神社御田植祭	昭和６１．６．５	３５ミリカラーポジ	瓜連町
757	ナーバナガシ	昭和６１．６	３５ミリカラーポジ	麻生町
758	板塔婆と藁草履	昭和６１．６	３５ミリカラーポジ	下館市
759	墓地の飾り	昭和６１．６	３５ミリカラーポジ	関城町
760	一ノ矢八坂神社にんにく祭	昭和６１．７．１３	３５ミリカラーポジ	大穂町
761	青屋様	昭和６１．７．２０	３５ミリカラーポジ	小川町
762	茅の輪くぐり	昭和６１．７．３１	３５ミリカラーポジ	八千代町
763	カッタテ祭（五所駒滝神社）	昭和６１．８．３１	３５ミリカラーポジ	真壁町
764	松の木	昭和６１．９．１０	３５ミリモノクロ	大宮町
765	ガラガラセンド	昭和６１．９．１９	３５ミリカラーポジ	茎崎町
766	田ん中祭り	昭和６１．９．２８	３５ミリカラーポジ	七会村
767	総社宮祭礼	昭和６１．９	３５ミリカラーポジ	石岡市
768	八幡神社	昭和６１．９か	３５ミリカラーポジ	江戸崎町
769	有賀様	昭和６１．１１．１１	３５ミリカラーポジ	大洗町
770	阿部神社どろんこ祭り	昭和６１．１１．１５	３５ミリカラーポジ	石下町
771	御船神社剣饗の神事	昭和６１．１１．２５	３５ミリカラーポジ	麻生町
772	加波山三枝祇神社本宮冬至の火渉り神事	昭和６１．１２．２２	３５ミリカラーポジ	真壁町
773	豊受大神宮筒粥神事	昭和６１	３５ミリカラーポジ	東海村
774	墓地に立てられた十三仏塔婆	昭和６１	３５ミリカラーポジ	関城町
775	萱葺き民家が残る集落	昭和６１	３５ミリカラーポジ	常陸太田市
776	田ん中祭り	昭和６１	３５ミリカラーポジ	七会村
777	露天商	昭和６１	３５ミリカラーポジ	豊里町
778	住吉神社オセンド	昭和６１	３５ミリカラーポジ	東海村
779	有賀様	昭和６１	３５ミリカラーポジ	大洗町
780	イイミミキケ	昭和６２．１．１４	３５ミリカラーポジ	水戸市
781	庭先に立てられた目籠	昭和６２．２．８	３５ミリカラーポジ	東海村
782	ニンニク豆腐をつけたヒイラギの枝	昭和６２．２．８	３５ミリカラーポジ	東海村
783	ヤッカガシ（豆カラにイワシの頭）	昭和６２．２．８	３５ミリカラーポジ	東海村
784	えりかけ餅	昭和６２．２．８	３５ミリカラーポジ	東海村
785	針供養	昭和６２．２．８	３５ミリカラーポジ	東海村
786	針供養	昭和６２．２．８	３５ミリカラーポジ	東海村
787	疱瘡神社祭礼	昭和６２．２．２４	３５ミリカラーポジ	協和町
788	地蔵石仏（慶長）	昭和６２．３．２	３５ミリカラーポジ	東村
789	徳利と杯を持つ男女の道祖神（安永年間）	昭和６２．３．２６	３５ミリカラーポジ	水戸市
790	雷神社湯立祭	昭和６２．４．６	３５ミリカラーポジ	下館市
791	十二所神社流鏑馬	昭和６２．４．１７	３５ミリカラーポジ	大子町
792	栗野春慶塗	昭和６２．７．３１	３５ミリカラーポジ	桂村
793	福徳弁天境内の供養塔	昭和６２	３５ミリカラーポジ	水戸市
794	徳利と杯持つ男女の双体道祖神石仏	昭和６２	３５ミリカラーポジ	水戸市
795	百万遍供養塔（文化3年）	昭和６２	３５ミリカラーポジ	水戸市
796	愛宕神社火祭り（火渡り）	昭和６２	３５ミリカラーポジ	水戸市
797	鷲子彫製作	昭和６３．２．１２	３５ミリカラー	美和村
798	真弓馬の製作	昭和６３．２．１２	３５ミリカラー	東海村
799	船	昭和６３．２．１２	３５ミリカラー	東海村
800	栗野春慶塗	昭和６３．２．４	３５ミリカラーポジ	桂村
801	石仏	昭和６３．６．２８	３５ミリカラーポジ	関城町
802	石仏に貼られた戒名の紙	昭和６３．８．１９	３５ミリカラーポジ	美浦村
803	鷲神社磐戸神楽	昭和６３．９	３５ミリカラーポジ	三和町
804	会瀬のささら	昭和６３．１０．３	３５ミリカラーポジ	日立市
805	祈願者名と寄付金額の紙（虚空蔵堂入口）	昭和６３．１２．１２	３５ミリカラーポジ	古河市
806	宝篋印塔	昭和６３．１２．２３	３５ミリカラーポジ	筑波町
807	石塔	昭和６３．１２．２３	３５ミリカラーポジ	筑波町
808	日輪寺境内虚空蔵尊のお堂	昭和６３頃	３５ミリカラーポジ	筑波町
809	栗野春慶塗	昭和６３頃か	３５ミリカラーポジ	桂村
810	葬式	昭和６３頃か	３５ミリカラーポジ	茨城町
811	ワァホイ小屋（鳥追い）	平成１．１．１４・１５	３５ミリカラー	北茨城市
812	七歳の祝着	平成１．２	３５ミリカラーポジ	笠間市
813	笠間焼	平成１．２．７	３５ミリカラーポジ	笠間市
814	金剛五仏種子とバク刻む石塔　庚申塔か	平成１．４．２５	３５ミリカラーポジ	東海村
815	神式の木碑と年祭の角塔婆	平成１．４．２５	３５ミリカラーポジ	東海村
816	道標兼ねる八衢彦大神文字塔（明治33年）	平成１．４	３５ミリカラーポジ	東海村
817	煉瓦積の竈	平成１．４	３５ミリカラーポジ	東海村
818	石塔	平成１．４	３５ミリカラーポジ	東海村
819	六地蔵石仏	平成１．４	３５ミリカラーポジ	東海村
820	地蔵・観音石仏	平成１．４	３５ミリカラーポジ	東海村
821	土蔵	平成１．５．８	３５ミリカラーポジ	東海村
822	三面六臂の石仏（宝暦13年）	平成１．５．８	３５ミリカラーポジ	東海村
823	臼・石臼	平成１．６	３５ミリカラーポジ	山方町か
824	葬式	平成１	３５ミリカラーポジ	大宮町

	内容	撮影年月日	形態	撮影地等情報
825	ザクマタ（犬供養）	平成２．３	３５ミリカラーポジ	水戸市
826	地蔵石仏	平成２．３	３５ミリカラーポジ	水戸市
827	村松虚空蔵尊参拝講中	平成２．４．３	３５ミリカラーポジ	東海村
828	十三参り土産の福俵	平成２．４．３	３５ミリカラーポジ	東海村
829	結城の桐下駄づくり	平成２．８	３５ミリカラーポジ	結城市
830	鹿島神宮御船祭	平成２．９．１	３５ミリカラーポジ	鹿島町
831	花園神社磯出祭	平成２．１１．３	３５ミリカラーポジ	北茨城市
832	八郷の線香づくり	平成２．１２．２０	３５ミリカラー	八郷町
833	水車	平成２．１２．２０	３５ミリカラー	八郷町
834	水分神石塔	平成２．１２．２０	３５ミリカラー	八郷町
835	結城の桐下駄づくり	平成２	３５ミリカラーポジ	結城市
836	花園神社磯出祭	平成２	３５ミリカラーポジ	北茨城市
837	ザル神祭り	平成３．３～４	３５ミリカラー	東海村
838	盆の準備（メハジキ燈籠）	平成３．８．１０	３５ミリカラーポジ	東海村
839	盆の準備（マコモの敷物）	平成３．８．１０	３５ミリカラーポジ	東海村
840	メハジキ灯篭に絵を描く子供達	平成３．８．１０	３５ミリカラーポジ	東海村
841	注連縄づくり	平成３．１２	３５ミリカラーポジ	東海村
842	注連縄づくり	平成３．１２	３５ミリカラーポジ	東海村
843	箕の中の餅を折敷に入れる	平成３．１２	３５ミリカラーポジ	東海村
844	蒸籠で餅米を蒸かす	平成３．１２	３５ミリカラーポジ	東海村
845	家の樹木に注連縄を張る	平成３．１２	３５ミリカラーポジ	東海村
846	餅つき	平成３．１２	３５ミリカラーポジ	東海村
847	家族で供え餅を作る	平成３．１２	３５ミリカラーポジ	東海村
848	注連縄を張った氏神の石祠、松と幣束を立てたワラホーデン	平成３．１２	３５ミリカラーポジ	東海村
849	縁側の伸し餅と軒下に吊るされた干し柿	平成３．１２	３５ミリカラーポジ	東海村
850	正月の食事	平成３．１２	３５ミリカラーポジ	東海村
851	ご幣を供えた文字入りの石塔（湯殿山）	平成３	３５ミリカラーポジ	水府村
852	前小屋城跡の泉	平成４．２	３５ミリカラーポジ	大宮町
853	大助人形の製作	平成４．７	３５ミリカラーポジ	東海村
854	天王さま	平成４．７	３５ミリカラーポジ	東海村
855	人形山車	平成４．８	３５ミリカラーポジ	潮来町
856	山車の人形を納める箱の蓋裏の墨書（明治12年）	平成４．８	３５ミリカラーポジ	潮来町
857	山車の彫物部分	平成４．８	３５ミリカラーポジ	潮来町
858	人形山車	平成４．８	３５ミリカラーポジ	潮来町
859	米俵が積まれた山車	平成４．８	３５ミリカラーポジ	潮来町
860	大生神社巫女舞神事	平成４．１１．１４	３５ミリカラーポジ	潮来町
861	日枝神社流鏑馬	平成５．４．１５	３５ミリカラーポジ	新治村
862	光明真言百億万遍供養塔	平成５．４	３５ミリカラーポジ	新治村
863	童子女松原	平成５．５	３５ミリカラーポジ	波崎町
864	庭先に置かれた丸い石	平成５	３５ミリカラーポジ	水戸市
865	日枝神社流鏑馬	平成５	３５ミリカラーポジ	新治村
866	上戸の獅子舞	平成６．１１．２３	３５ミリカラー	牛堀町
867	地蔵・観音石仏	平成６末	３６ミリカラー	水戸市
868	向井町のささら	平成７．１１．３	３５ミリカラー	水戸市
869	棒ささらの操り方	平成７．１１．３	３５ミリカラー	水戸市
870	谷中の棒ささら獅子頭	平成７．１１．３	３５ミリカラー	水戸市
871	念仏回向塔（文政5年）	平成７	３５ミリカラーポジ	水戸市
872	ワァホイ小屋	平成８．１．１４	３５ミリカラー	北茨城市
873	清水のささら	平成８．１０．１０	３５ミリカラー	里美村
874	折橋のお火消行列	平成８．１０．１０	３５ミリカラー	里美村
875	三匹獅子の頭	平成８．１１．１２	３５ミリカラー	里美村
876	小祠	平成８．２．８	３５ミリカラー	鹿嶋市
877	「水戸東照宮御祭礼絵巻」大正４年水戸中学校教諭大橋三平筆（接写）	平成８．８	３５ミリカラー	水戸市
878	お堂のなかにある棒状の石	平成９．９	３５ミリカラー	水戸市
879	ワラホーデンの中の石	平成９．９	３５ミリカラー	水戸市
880	杉の大木	平成９．９．２７	３５ミリカラー	美和村